



反革命二面派
周揚を評す

姚文元

北京 外文出版社

反革命二面派 周揚を評す

姚文元

外文出版社

北京

毛主席のことは

帝国主義者と国内の反動派はけっしてかれらの失敗に甘んぜず、なお最後のあがきをするであろう。全国平定後も、かれらはやはりさまざまな方法で破壊と攪乱に従事し、時々刻々、中国でその復活をたくらむであろう。これは必然的なことであり、少しも疑う余地のないことであって、われわれは絶対に自己の警戒心をゆるめてはならない。

反革命二面派 周揚を評す

姚文元

プロレタリア文化大革命の奔流が、大海の怒濤のように、暗く無気味な毒蛇の穴にはげしく押し寄せた。

ズシン！ 反革命修正主義分子が長期にわたって盤踞していた旧中央宣伝部の伏魔殿はくずれさった。

最近おこなわれた文学・芸術界のプロレタリア文化大革命の大会で、江青同志はつぎのように指摘した。「旧北京市委員会、旧中央宣伝部、旧文化部はたがいに結託して、党と人民にはかりしれない罪を犯してきたが、これは徹底的に摘発し、徹底的に清算しなければならぬ。

また、わが党内における、毛主席をはじめとする党中央のプロレタリア革命路線に反対することを目的としたブルジョア反動路線も徹底的に摘発し、徹底的に批判しなければならぬ。」

旧中央宣伝部の周揚らを摘発し、清算することは、毛沢東思想によって数十年らしい革命史

を総括することとかかわりがあり、社会主義革命の時期における社会主義と資本主義の二つの道の闘争の歴史とかかわりがあり、党内における毛主席に代表されるプロレタリア革命路線とブルジョア反動路線の二つの路線の闘争の歴史とかかわりがあり、いっそう深く政治面からブルジョア階級の反党・反社会主義の黒い糸を掘りだすこととかかわりがあるのであって、かならず深くつっこんで徹底的にこれをおこなわなければならない。

周揚は典型的な反革命二面派である。かれは一貫して、二面的な手口で自己の反革命の政治的正体をおおいかくし、歴史を書き変え、ごまかしの手をつかって逃げのび、赤旗をかざして赤旗に反対し、さまざまな犯罪的行為をおこなってきた。かれは、われわれが現在そして将来、反革命二面派を見分けるうえで、もってこいの反面教師である。かれの最後の公開報告、すなわち一九六五年十一月二十九日に、全国青年業余文学創作活動家大会でおこなった「毛沢東思想の赤旗を高くかかげ、労働もでき創作もできる文学・芸術の戦士になろう」と題する報告は、赤旗をかざして赤旗に反対する典型的なものである。

この報告は、反革命修正主義集團の頭目の意図を忠実に実行して、ブルジョア階級の代表者を批判することについての毛沢東同志の指示に必死になって抵抗している。この報告は、マルクス主義の語句をベールにして、十六年らしい文化戦線における階級闘争をほしのままに歪曲し、捏造している。この報告は、修正主義分子周揚を毛沢東文学・芸術路線の執行者にしたあげ、歴史を完全に転倒させている。とくに憤激にたえないのは、周揚がこの報告のなかで、毛沢東同志のプロレタリア文化革命についてのきわめて重要な指示を卑劣にもねじまげていることである。

一九六四年六月、毛沢東同志は、周揚とかれの支配している全国文学芸術界連合会ならびにその各所属協会にたいして、するどい批判をくわえ、こう指摘した。これらの協会とそれが掌握している刊行物の大多数（少数のいくつかは、よいとのことである）は、この十五年らしい、基本的に（すべての人ではない）党の政策を実行せず、役人風や旦那風を吹かして、労働者、農民、兵士に近づかず、社会主義の革命と建設を反映しようとしなかった。ここ数年は、なんと修正主義すれすれのところまで転落してしまつた。もし真剣に改造しなければ、将来いつかは、きつとハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になつてしまふにちがいない。これは、周揚をはじめとする文学・芸術界の反党・反社会主義の黒い糸にたいするきびしい批判であり、打撃であつた。この指示は、全国解放いらい、周揚をふくむ旧中央宣伝部の指導者の実

行してきたものが、反党・反社会主義・反毛沢東思想の修正主義文学・芸術路線であったことを徹底的に暴露し、文化戦線におけるほとんどの機関、団体、刊行物が終始修正主義集団におさえられて、ブルジョア階級のプロレタリア階級にたいする全面的な攻撃の道具になりさがっており、かならず権力奪取闘争をおこなわなければならないことを徹底的に暴露し、文学・芸術界の修正主義分子周揚一味が資本主義復活のための世論を準備し、ひとつは時機が到来したならば、フルシチョフのような野心家の演出のもとに、ペトフィ・クラブのような反革命クーデターを演じようとしていたことを徹底的に暴露した。

毛沢東同志のこの指示は、一九六四年七月十一日、公式文書として党の各級組織に配布され、全国の文化革命をおしすすめた。しかし、一貫して毛沢東同志の指示にさからってきた周揚は、その報告のなかで、毛沢東同志のことばをだれはばかることなくつぎのように改ざんした。「かれは、一部の重要な文化部門の指導者、一部の文学・芸術刊行物は基本的に党の政策を実行せず、労働者、農民、兵士に近づかず、社会主義の革命と建設を反映しようとしなかった、と指摘している」。毛沢東同志の指摘した「十五年らい」というこの長い期限をぬきとり、毛沢東同志の指摘した「大多数」の文化部門と刊行物を「一部」の文化部門と刊行物に減らし、

あらゆる手口をつかってこの反党・反社会主義の黒い糸の罪悪をおいかくそうとしたのである。毛沢東同志が、かれら一味は「役人風や旦那風を吹かし」ている、つまりブルジョア貴族の旦那方がプロレタリア階級と勤労人民にたいして独裁をおこなっていると暴露したことも周揚によってぬきとられた。もつとも許すことのできないのは、かれが毛沢東同志のもつとも重要なことば、つまり周揚の支配するこれらの協会は、「ここ数年は、なんと修正主義すれすれのところまで転落してしまった。もし真剣に改造しなければ、将来いつかは、きっとハンガリーのペトフィ・クラブのような団体になってしまふにちがいない」と指摘したこの正しい科学的論断ときびしい政治的警告を完全に切り捨て、あとかたもなくぬき去ってしまったことである。これは、「毛沢東思想の赤旗を高くかかげる」というベールのもとに、毛沢東思想を改ざんし、歪曲し、これに抵抗するという真理をぬすみとる大陰謀である。

毛主席のこの指示は、ぜったいに周揚の黒い手でぬりつぶされるものではない。毛主席のこの指示を指針とし、十六年らしいの階級闘争の歴史にたいする分析をつうじ、大量の確実な事実をもって、周揚の反革命二面派の正体をあばきだしてみよう。

反革命二面派の歴史

周揚は、青年業余作家にたいする報告のさい、自分が「一貫して正しかった」かのようによそおっておどろだし、解放いらいの「五回にわたる大論争、大批判」について「総括」をおこなっている。かれは自分を「毛沢東文学・芸術路線を全面的に正しく執行してきた」代表者にまでしたてあげている。

これはごまかしである。これはでたらめである。これは白黒を顛倒させるものである。これは白日のもとで歴史を偽造するものである。

真相はいったいどうだったのか。

これまでの思想戦線における大闘争の前後の周揚の正体をみてみよう。

最初の大闘争は、一九五一年の映画《武訓伝》^①にたいする批判である。この闘争は中華人民共和国建国初期におこなわれた。当時、土地改革と反革命鎮圧運動が全面的にくりひろげられており、ブルジョア階級は封建残余勢力と結託して、年若いプロレタリア独裁に猛烈な攻撃をかけてきた。かれらは《武訓伝》をほおりだした。これは地主階級とその手先を熱狂的にた

たえ、もつとも恥ずべき奴僕主義、投降主義を熱狂的にもちあげ、農民の革命闘争を気違いのように中傷したきわめて醜悪な反革命の映画である。すでに解放まえに、国民党反動派の「中国映画製作所」がこの映画の製作に手をつけていたが、完成をみずに人民解放軍の砲声がとどろきわたった。解放後、周揚修正主義集団のいまひとりの頭目である夏衍が国民党反動派の未完成の事業をうけつぎ、かれの直接の指導のもとにこの反革命の映画を完成させた。この映画は上映されると、たちまち党内外のブルジョア階級の代表者からほめたえられ、武訓と「武訓精神」にまなぶよう、つまりプロレタリア階級が武訓のように地主階級とブルジョア階級のまえにひれふすようよびかけた。毛沢東同志はみずから《武訓伝》の批判をおこした。五月二十日の『人民日報』にかいた「映画《武訓伝》についての討論を重視すべきである」という社説のなかで、毛沢東同志は、文学・芸術界の一部の「マルクス主義を修得したと自称する共産党員」がブルジョア反動思想に投降した誤りをするべく指摘し、「ブルジョア階級の反動思想が戦闘的な共産党に侵入してきていること、これが事実ではないといえるだろうか。一部の共産党員が修得したと自称しているマルクス主義は、いったいどこへふきとんでしまったのか」ときびしく問いただした。

毛主席のいう「一部の共産黨員」の主要な人物のなかに周揚がふくまれていたことはいうまでもない。周揚は当時、中央宣伝部副部長で、文化部党組の書記であった。かれは「わたしもかなりまえに公武訓伝をみた」といつているが、この映画は、かれの批准をへて全国的に上映されたのである。この反動映画は上映されると、すぐに毛沢東同志の目にとまった。そのとき、中央のある同志が、公武訓伝はブルジョア改良主義を宣伝する反動映画であるから、批判しなければならぬと周揚にいったが、毛沢東同志の意見をつたえるまえに、周揚にはねつけられてしまった。周揚はたいへんな鼻息で、まるで貴族の大胆那そっくりの態度で、「きみ、改良主義が多少あったところでたいしたことはないだろう！」と軽べつしきった口調であった。

五月二十日の『人民日報』社説が発表されたあと、毛沢東同志にきびしく追及されて、周揚はやむをえず二言三言ニセの検討をおこなった。だが、周揚は実際には、うわべでは従うようにみせかけながら心の底ではさからい、反撃の時機をねらっていたのである。一九五一年六月四日、公武訓伝の批判がはじまると、周揚はさっそく腹心のひとりである于伶に黒い手紙をおくり、「思想闘争の問題では」、「具体的な処理は慎重に、きめこまかにやらなければなら

ず、あせったり、荒々しくやつたりしてはならない」と指示をあたえた。そして、「われわれがいちばん知りたいのは真実の状況だ」とあせりぎみにいった。于伶は当時、上海文化局副局長の椅子をかすめとり、さまざまの化物どもをかばい、かれらとぐるになっていた。「慎重に、きめこまかに」というのは、于伶に、ブルジョア階級の勢力を保護し、文学・芸術のペーブルをまとった反革命分子を保護するさい「きめこまかに」心をくばれということであり、「あせったり、荒々しくやつたりしてはならない」というのは、文化界の反革命修正主義分子に、できるだけ毛主席の批判のするどい政治的内容をよわめ、ひきのぼし戦術によって重大な階級闘争を最後には「認識」の問題にすりかえよ、ということである。周揚が手紙のなかで傍点をうった「真実の状況」というのは、ブルジョア右派を保護するためのさまざまな資料をあつめて、反党活動をおこなえということである。これは周揚一味が公武訓伝批判の過程でおこなった反党の大陰謀である。

毛沢東同志の提案で、周揚のたびかさなる抵抗をはねのけて、武訓の歴史調査団がつくられた。調査団は周揚がおくりこんだかれの秘書鐘恬棠のサポータージュヤ破壊活動を克服し、広範な大衆にたよって仕事をすすめた。この調査の結果が、七月二十三日から二十八日にかけて

『人民日報』に連続して発表された『武訓の歴史調査記』である。毛沢東同志がみずから手くわえたこの文章は、動かすことのできない事実で武訓——この大地主、大高利貸し、大ごろつきの反動的正体をあばき出し、この大弁論にもっともすぐれたしめくりをおこなった。このとき、山のような動しがたい証拠をまえにして、これ以上抵抗しきれなくなった周揚は、ただちに戦術をかえ、態度を一変させて、文章を書き、資本を手にいれようとした。かれは、八月に発表した文章のなかで、まず自分が「その重大な政治上の反動性を十分に認識し、適時指摘できなかった」と二言三言いっておいてから、たちまち姿を変えて、まるでこの偉大な闘争の指導者が他のだれでもなく、まさに自分であったかのように、「系統的な」総括をおこなった。

もちろん、周揚は毛沢東同志の批判に甘んじてはいなかった。批判の高まりがすぎてまもなく、周揚はまちきれなくなったかのように、第二回全国文学・芸術活動家代表大会の演壇に立って、反撃に出、「武訓伝」批判の「偏向をただし」た。かれは、「さらに多くのすぐれた文学・芸術作品を創作するために奮闘しよう」と題する報告のなかで、「映画「武訓伝」の批判ののち」、「われわれの批判活動にはいくつかの偏向があらわれており」、「これを正さなければ

ならない」と声を荒だてていった。そして「教条主義的な公式から出発した「いくつかの粗暴な、独断的な批判」や「一部の読者の過激な意見」（つまり広範な労働兵の革命的批判）、さらに党の指導部が「創作事業」を「支持」しないことは、「少なからぬ作家に精神的な圧迫と苦痛を感じさせている。こうした空気をなんとかして変える必要がある」とはげしく攻撃した。

見ていただきたい。周揚はここで、なんと徹底的に「偏向をただし」たことだろう。実際、かれは、毛沢東同志がおこした反動映画「武訓伝」にたいする批判を根底から否定し、労働兵の批判をひとからげにしてやく殺し、また、毛沢東同志の「マルクス主義を修得したと自称する共産党員」周揚らにたいする批判をくつがえしてしまった。プロレタリア階級がブルジョア階級を批判しだすと、周揚は「苦痛」とか「圧迫」とか大声でわめきたてた。このブルジョア階級の代表者はその階級の叫び声を、なんと敏感に反映していることであろう！

見ていただきたい。「武訓伝」批判の前後に、周揚がどのような役割を演じたか。最初、かれは、文学・芸術界の「大立物」として、一族郎党をひきいて毒をばらまき、さかんに毛沢東思想に反対し、毛主席をはじめとする党中央の指導に反対して、毛沢東同志の指示に反抗し

た。そして、たたかひの火ぶたが切っておとされると、かれは、大わらわになつてニセの検討をおこない、うそいつわりで逃げのび、党と人民をあざむこうとした。そのあと、かれは、いかにも自分が「正しかった」かのようによそおつて、闘争の「総括」をおこない、その功績を自分のものにしよとした。つづいて、周揚は運動をしないで右旋回させ、革命的人民にたいして反撃、報復に出た。同志のみなさん、注意していただきたい。周揚は反革命二面派の海口をもつてあそぶ老練家なのである。この点をつかんでおけば、われわれは周揚のこれまでの闘争のなかでの基本的な姿をはつきりと見きわめることができる。また、すでに暴露されたか、あるいはいまだに暴露されていないその他の「二面的人物」の特徴をはつきりと見きわめることができる。

第二回の大闘争は、一九五四年の俞平伯の『「紅樓夢」研究』^②と胡適の反動思想にたいする批判である。この闘争はわが国の社会主義的改造が深くくりひろげられている重要な時期におこなわれた。党が社会主義的工業化と農業、手工業、資本主義的工商業にたいする社会主義的改造の総路線をうちだすと、みずからの滅亡に甘んじないブルジョア階級は社会主義勢力にたいする攻撃をつよめるとともに、必死になつて党内にかれらの代理人を物色しだした。党の

第七期中央委員会第四回総会は、高崗・饒漱石反党連盟による党のつとりの陰謀を徹底的に暴露し、粉砕した。スターリンの死後、現代修正主義の逆流が氾濫^{はんらん}しだした。こうした状況はわが国の文学・芸術界にも直接影響をおよぼし、党内外の一部のブルジョア分子は活躍をはじめた。周揚をはじめとする文学・芸術界の修正主義集団は、かれらが独占する刊行物や新聞を利用して、ブルジョア階級の「権威者」を太いにたたえ、支持し、マルクス主義の新生の勢力にたいして貴族の大旦那のような態度で圧力をくわえ、打撃をあたえた。かれらは全力をあげて極反動の胡適派の観念論を支持し、ブルジョア階級批判に立ちあがるすべての人びとに悪どい弾圧をくわえ、社会主義的改造をこばむブルジョア階級に奉仕したのである。毛沢東同志は、文学・芸術界が黒い糸によつて独裁されている重大な情勢をみて、こんどは、『「紅樓夢」研究』と胡適の反動思想にたいする批判をおこした。

一九五四年十月十六日、毛沢東同志は、中国共産党中央委員会政治局の同志とその他の関係ある同志にあてた手紙のなかで、「大物」をもつて自任し、ブルジョア階級批判に弾圧をくわえている「ある一部の人びと」を鋭く、深刻に批判した。毛沢東同志は憤りをこめてつぎのようにつづけた。事は二人の「小物」によつておこされたものである。ところが、「大物」はとか

くそれに注意をはらわず、また、しばしばそれを阻止している。かれらは観念論の面でブルジョア著述家と統一戦線をくみ、ブルジョア階級のとりことなることに甘んじている。これは映画『清宮秘史』^⑧や『武訓伝』^⑨が上映されたときの有様とほとんど同じである。人から愛国主義の映画といわれているが、実際には売国主義の映画である。『清宮秘史』は全国で上映された後、いまだに批判されていない。『武訓伝』は批判されたとはいえ、いまだに教訓が引きだされていない。そこへまた、俞平伯の観念論を容認し、「小物」の生氣あふれる批判論文をおさえるという奇怪な事態があらわれたが、これはわれわれの注意すべきことである。

毛沢東同志が鋭く批判した、「大物」をもって自任し「小物」をおさえつけた「ある一部の人びと」、「人民日報」に俞平伯批判の文章を転載することに反対した「ある一部の人びと」のなかには、頭目の周揚のほか、丁玲、馮雪峰が牛耳っていた『文芸報』もふくまれていた。

ほかでもなく周揚こそが、一貫してブルジョア階級の「権威者」をほめたたえ、マルクス主義の新生の勢力をおさえつける反動路線を実行してきたのである。一九四九年六月三十日、かれは『文匯報』に発表した『知識人の問題について』と題する講話のなかで、ブルジョア知識

⑧

人を「革命の指導力の一つ」であるともちあげ、かれらから離れたら「革命は成功しない」とか、都市にはいった労働者、農民の幹部には知識がないので、「この面の欠陥は都市の知識人のおおきなわなければならない」とかうそぶいた。かれはまた、「作家、芸術家自身の団体にたよ」らなければならないとか、「社会方式で芸術創作を指導」しなければならない（一九五三年『文芸報』第十九号）とか再三にわたってわめきたて、プロレタリア階級がブルジョア階級の「権威者」の支配する「団体」に手を出すことをゆるさなかった。周揚は、このようにして、ブルジョア階級の「権威者」、裏切りもの、反革命分子を文化界の各分野におくりこみ、そこを「おぎな」って、「指導力」にし、かれらにたいするすべての革命家の批判をおさえつけてきたのである。

ほかでもなく周揚こそが、一九五四年、『「紅樓夢」研究』にたいする批判がはじまる直前になっても、なお『「五・四」の文学革命の戦闘的伝統を発揚しよう』という文章のなかで、すっかり感激して、ブルジョア知識人を「民主的傾向」があるとか、「思想も才能もある」とか、「抱負と理想」があるとか、「良心的で、正直な人」だとか……ほめたたえたのである。見ていただきたい。中国のブルジョア知識人を天までもちあげているではないか。

ほかでもなく周揚こそが、この文章のなかで、「西側の先進的な科学と先進的な文化・思想」を大いにほめたたえたのである。ここでいう「西側」とは欧米のブルジョア文化、つまり、さまざまな反動的ブルジョア観念論と形而上学的世界観のことであり、このなかでも影響がもつとも大きかったのは胡適派の観念論、すなわち、ブルジョア階級のプラグマチズムである。ブルジョア反動哲学をこのように神聖なものだというのは、俞平伯のような連中のブルジョア階級の「権威者」にたいするもつとも大きな支持ではないだろうか。これはブルジョア階級の代弁者となることにまったく「甘んじている」ことではないだろうか。

ほかでもなく周揚こそが、この大闘争のなかで、ふたたび反革命二面派の役割を演じたのである。たたかいははじまるとすぐに、周揚は必死になってこの鋭い政治・思想闘争を、「純」學術的討論にすりかえようとした。一九五四年十月二十四日、かれは、中国作家協会古典文学部のひらいた座談会で、まっていたとばかりに、人びとに、「複雑な内容をふくむ」いわゆる「學術・思想上の問題」を研究するように要求し、多くの題目をもちだしてきて、スコラ的考証をおこなうように要求した。十月二十八日、『人民日報』は毛沢東同志の指示にもとづいて、『文芸報』の編集者に質す文章を発表し、文学・芸術界の一部の指導者のブルジョア貴族

の大旦那の態度を公然と暴露した。風向きがおかしいとみてとった周揚は、さっそくニセの検討をおこなった。一九五四年十二月八日、かれは全国文学芸術界連合会議長団と全国作家協会議長団の拡大会議で、「ブルジョア観念論にたいする批判と闘争を放棄したことは」、「われわれの活動のなかでの最大の誤りである。わたし自身もこの誤りを犯した」などといった。この「検討」は、一皮むけば、「誤りはみんなに責任がある」といつているにすぎない。かれは自分の反動的なブルジョア階級の政治的立場を清算しようなどとは毛頭考えておらず、ひたすらこれによって逃げのびようとしたのである。「われわれ」は「胡適のブルジョア観念論思想にたいするいつそうつこんだ批判をおこなった」といつているが、これは世のなかの功績をすべて自分のものにしてしようとするもので、恥などといったものがまるでないかのようである。だれもが知っているように、この「われわれ」のなかには周揚がふくまれていない。周揚のいう「全面的な批判」とは、身をやつすためのふるくさい演技の再演でしかなく、かすめとった指導的地位をまもり、闘争を右旋回させ、反撃、報復にでるためのものである。一九六一年、六二年に、かれらは百万字にのぼる、曹雪芹没年の考証、祖先の考証、大觀園遺址の考証……などといったあやしげな文章をつぎつぎと発表し、奇妙な地図を新聞全ページにのせ、胡適派の

観念論の大復活をはかろうとしたのではなかったか。

第三回の大闘争は、一九五四年から一九五五年にかけて、胡適批判について展開された胡風反革命集団④に反対する闘争である。これは毛沢東同志をはじめとする党中央がみずから指導した、かくれた反革命分子肅清の鋭い闘争であり、反革命勢力にたいするきびしい打撃であった。周揚の思想は胡風の思想と本質的には同じである。かれは胡風と同じように、「芸術の最高原則は真実である」(一九五二年)とくりかえし鼓吹して、マルクス主義の世界観に反対し、毛沢東思想に反対した。かれは胡風と同じように、文学・芸術が労働者、農民、兵士に奉仕するという方向に反対し、作家が労働者、農民、兵士の闘争のなかに深くはいることに反対し、はては「はいらなくても、結合はできる」とか、「われわれと労働者、農民とは分業がなければならぬ」(一九四九年)とかわめきたて、公然と貴族の大旦那をもって自任した。かれは胡風と同じように、大きな題材にとりくむことに反対し、文学・芸術がプロレタリア階級の政治に奉仕することに反対し、「題材の選択」には「完全な自由」が必要であり、「この自由は最大限に保証」されなければならない(一九五三年)と大いに鼓吹した。かれは胡風と同じように、ブルジョア・ヒューマニズムと人間性論を主張し、階級分析に反対し、「新しい国民性の成長

の過程」(一九四九年)といったたぐいの人間性論のことばで、勤労人民の階級的面目と階級的性格を歪曲した。かれは胡風と同じように、「創作とは作家の生活との格闘の過程」であり、「主観と客観との完全な融合」であり、「物我一体」(一九四一年)であるといったたぐいのきわめて反動的な主観的観念論の創作方法を提唱した。かれは胡風と同じように、西側のブルジョア文学・芸術を無上の開祖ともちあげた。周揚は胡風の反動的文学・芸術思想をすべて身につけており、ただいっそう巧妙に偽装しているだけなのである。一九五二年、周揚、林默涵らは胡風「批判」の座談会をひらき、その席上で、胡風は「政治的態度では毛沢東同志を擁護」しており、「大きな政治方向、政治闘争では」、「党の側に立って」いるといい、さらにはこの反革命の頭目を「党外のポリシェビキ」とまでもちあげた。このことは、周揚一味が「政治方向」では胡風と一致していることを完全に暴露した。胡風反革命集団は周揚らを攻撃したが、それはけっして周揚のこの点を攻撃したのではない。また攻撃しようとしても不可能である。まさに、『人民日報』の「胡風反革命集団に関する三回目的資料」の編集者のことばのなかで指摘しているように、「反革命分子が少数のものを攻撃したのは、かれらの手口であって」、かれらの攻撃の目標はわが党と毛沢東思想にあったのである。だが、周揚は反胡風闘争を利用し

て投機をやり、胡風が周揚を攻撃しているという仮象をとらえて、自分をあたかも毛沢東文学・芸術路線の代表者であるかのようににしてあげた。それ以来、かれはいたけだかになった。それ以来、かれは赤旗をかざして赤旗に反対する手口をいつそう露骨に用いるようになった。だが実際には、ばけの皮をはがせば、これは政治的投機であり、大ペテンであった。

狐のしっぽはかくせるものではない。はたして、胡適、胡風批判の革命の硝煙がまだ消えさるぬうちに、周揚はそくさとブルジョア階級にたいする批判と闘争を右旋回させた。一九五五年十一月、周揚は「『草の葉』と『ドン・キホーテ』を記念する」と題する文章をかけた。当時、右翼日和見主義を断固批判した毛沢東同志の『農業協同化の問題について』の報告がすでに発表され、中国の農村は偉大な社会主義の高まりのなかにあった。毛沢東同志は文学・芸術活動家に、農村へいき、火のような大衆闘争のなかにはいって、「いく千いく万」の英雄的人物を大いにえがくようよびかけた。だが、周揚はそれに真正面から対抗して、ドン・キホーテの「高度の道徳的原則」、つまりブルジョア階級の道徳的原則なるものを狂熱的に鼓吹した。かれはとくに、一九世紀のアメリカのブルジョア詩人ホイットマンを狂熱的にたたえ、「闘争に参加した」「手本」にするよう作家に要求した。かれはまたホイットマンの作品のなかから

「新しい型の人間像」をひっぱりだして、それを中国人民の「輝かしい手本」にしようとした。つぎにそれをみてみよう。

ホイットマンのおどろくべき貢献は、かれがその詩のなかで、「人間のすぐれた形象をつくりあげたことである。かれの詩をよむと、そこに、ホイットマン式の人間、新しい型の人間、健康な身体、大きな度量、崇高な理想、労働できたえられた手、そして、永遠の樂觀をもった人間像をみいだす。

ホイットマン式の人間はたしかに、新しい型の人間であり、われわれが学び、見習うべき輝かしい手本であるといえる。

ここで、周揚は「労働できたえられた手」という人を惑わすことばで、ホイットマンがあたかも勤労人民をたたえているかのようになっている。だが、『草の葉』がたたえている「人間」は、抽象的な人間でもなければ、ましてや勤労人民でもなく、アメリカのブルジョア階級の化身なのである。われわれが調べたところによると、周揚は一九四一年十一月に、延安の『解放日報』にのせた文章のなかで、すでにアメリカのブルジョア階級をもちあげている。そ

のとき、かれは、かれが賛美してやまないホイットマン式の「人間」を、「自信にみちたアメリカのブルジョア階級の典型、剛健な体とおおらかな精神の持ち主」と臆面もなくいきまっている。もう結構だ。ブルジョア個人主義の狭隘な心を「おおらかな精神」とほめあげて、よくも平気でおれるものである。六億の労働者、農民が農業、手工業、資本主義的工商業にたいする社会主義的改造の高まりをもちあげているとき、そして、社会主義的英雄がぞくぞくと出現しているとき、周揚はまたもや、反動的な、虚偽にみちたブルジョア階級の「民主主義と自由」を「崇高な理想」ともちあげ、ホイットマンを「闘争に参加」した「手本」にしたあげ、「アメリカのブルジョア階級の典型」を「新しい型の人間」といい、「輝かしい手本」とし、ドン・キホーテの騎士道を「高度の道徳の原則」とほめあげ、人民にたいしてこれに「学び」、これを「見習え」といつている。これは毛沢東思想に公然と対抗するものでなくてなんであるか。六億の労働者、農民のくりひろげている天をもくつがえす社会主義革命にたいするいたけだかな反撃でなくてなんであるか。都市と農村のブルジョア階級および党内の右翼日和見主義者に「永遠の樂觀」をもたせ、かたくなに社会主義的改造に抵抗させ、あくまでも資本主義の道をあゆませようとするのでなくてなんであるか。

これだけではない。西側ブルジョア階級をさかんにほめあげたあと、一九五六年三月に、周揚はさっそく「社会主義文学を樹立する任務」という報告のなかで、五人の者をいわゆる「現代における言葉の芸術の大師」に封じるといふ破天荒の挙にでた。かれはうやうやしく「大師」の冠をさしあげて、みずからブルジョア階級の「権威者」の忠実な代理人であることをあきらかにした。これも外国から学んできたものである。これはプロレタリア階級に、ブルジョア階級の「権威者」に跪き、投降するよう命令するものであり、毛沢東同志のたびかさなる指示にたいする気違いじみた大がかりな反撃である。この冠は多くの人の口を封じた。一九五八年と一九五九年に、革命を要求する「小物」があえて攻撃される危険を冒して、周揚の禁令を破り、なんらかの「大師」にたいして少しばかり批判をくわえた。すると、周揚がすぐさまとびだしてきて、これらの「大師」をかばい、もつとも悪どい言葉でなんども批判者に打撃をくわえた。一九六二年二月、かれは「老劇作家」との談話のなかで、「一部の作家が言葉の芸術の大師にされたことに、これは必要以上にもちあげるものだといって不満をもちますものがあるが、……いったい言葉を学ぶ必要がないというのか。大師に学ぶ必要がないというのか」と憎しみをこめて反ばくした。これは青年におとなしくブルジョア階級の「大師」の奴隷

になれということではないだろうか。ブルジョア階級にたいして少しの「不満」をもらすことも許さない。これはまったく乱暴きわるものである。

第四回目の大闘争は、一九五七年のブルジョア右派の気違いじみた攻撃を粉碎した偉大な闘争である。この闘争は、わが国の経済戦線における所有制の面での社会主義的改造が基本的になしとげられたのちにくりひろげられた。ソ連共産党「第二十回大会」の後、国際修正主義が大いに台頭し、氾濫したが、これは、国内の修正主義の逆流の発展を直接うながした。周揚がこの時期に発表した一連の演説や文章は、ブルジョア右派の気違いじみた攻撃に精神的武器を提供した。

一九五六年三月、ソ連共産党「第二十回大会」がひらかれてまもなく、周揚は文学・芸術活動の座談会であからさまにつきのようにつぎのようについた。

かならず資本主義国にまなばなければならない。われわれはソ連にまなぶだけではなく、資本主義国の進歩的な芸術にもまなばなければならない。……たとえばキューリ夫人はたいへんすぐれた映画で、思想性も芸術性もひじょうに高い。これは十数年前のアメリカの映画で、共産主義を正面からは宣伝していないが、共産主義の世界観を描写しており、キューリ夫人の世

界観とわれわれ共産主義者の世界観とは一致している。したがって、われわれは資本主義国の進歩的な文学・芸術といっそう緊密な関係をもたなければならず……かれらのすぐれたものにくみとらなければならない。こうした過程のなかで、われわれはかれらに影響をあたえ、かれらもまたわれわれに影響をあたえるのである。

これは「平和的転化」の計画書である。キューリ夫人はアメリカのルーズベルトが権力の座にあつたときつくられた反動映画で、キューリ夫人の生涯をつうじて、ブルジョア・ヒューマンイズム、平和主義、個人奮闘、出世主義、階級協調の反動的な観点を集中的に宣伝し、科学者の活動は超階級的、超政治的なものであり、「全人類」に奉仕するものであるということ宣言しており、事実上、独占ブルジョア階級の高利潤搾取のために奉仕しているのである。アメリカの独占ブルジョア階級がこうした「伝記映画」をつくったのも、いっそう目だたぬ形で、ブルジョア階級に化粧をほどこし、アメリカの勤労人民に「影響」をあたえ、かれらを腐食し、階級闘争の道を放棄して資本主義社会の上層部にのしあがるような幻想をあたえるためであつて、その意図はきわめて悪らつなものである。これはエロ映画、「西部劇」より、いっそう大きなペテン的役割をもっている。周揚がこれを宝とし、「進歩的芸術」とほめそやし

ているのは、アメリカ帝国主義がやろうとしてやれなかったこと、すなわち西側のブルジョア反動的芸術によって「われわれに影響をあたえ」、われわれの芸術を社会主義の羊頭をかかげて資本主義の狗肉ドッグ・フleshを売る修正主義の芸術に変え、新しいブルジョア分子を育成することに奉仕するためである。この数年らい、周揚一味の支配のもとで、どれほど多くの悪質な映画がつくられたか、またこれらの悪質な映画と西側のブルジョア芸術とがどれほど「緊密な関係」にあったか、このことを見ただけでも、同志たちは、アメリカのこうした「進歩的映画」に学んだ結果がなんであったかがわかるだろう。

周揚は、「キュリー夫人の世界観とわれわれ共産主義者の世界観とは一致している」といっている。これは一大発明である。周揚たちがブルジョア階級の世界観と「一致している」ということは、周揚一味のような「共産主義者」が口にする「共産主義」が、エセ共産主義、修正主義であることを物語るものである。これはみずから大きな秘密を暴露したことはないか。自然科学の分野の資本主義の道をあゆむ実権派も周揚と同じように、いたるところでブルジョア階級の反動的 세계観と「一致している」ことをいっているのではないか。

それからまもなく、周揚は、一九五六年九月二十六日の『人民日報』に、「社会主義建設の

偉大な事業のなかで、文学・芸術に大きな役割を發揮させよ」という文章を発表した。これは反社会主義のブルジョア反動綱領であり、反党・反毛沢東思想の宣言書である。

周揚はこの文章のなかで、「俗悪化」、「簡單化」、「法度はつど、しきたり」、「宣伝の役割」に大いに反対し、党の「教条主義」、「セクト主義」、「文学・芸術活動にたいする單純な、粗暴な態度」は、「作家や芸術家の創作の自由をひどく束縛している」といっている。自由とは階級的内容のあるものである。抽象的な「創作の自由」などというものは、ブルジョア階級の反党的スローガンである。階級社会では、階級的な自由があるだけで、超階級的な自由などはない。プロレタリア階級と勤労人民にブルジョア階級にたいして独裁をおこなう自由があれば、ブルジョア階級とすべての反動派には反革命活動をおこなう自由はなく、ブルジョア階級に党に反対し、社会主義に反対する自由があれば、プロレタリア階級と勤労人民には社会主義革命と社会主義建設をおこなう自由はない。周揚が党に「創作の自由」を要求しているのは、ブルジョア階級のために反党・反社会主義の自由を強要し、化物どもを「束縛」から抜けださせ、かれらにほいままに反毛沢東思想・反社会主義の反革命活動をおこなわせるためである。周揚の攻撃している「教条主義」、「法度、しきたり」とは、毛沢東同志が『延安の文

学・芸術座談会における講話』のなかで明らかにしているプロレタリア階級の文学・芸術についての根本原則であり、「宣伝の役割」とは、文学・芸術によるプロレタリア階級の世界観、すなわち共産主義的世界観の宣伝に反対することである。「創作の自由」、「教条主義反対」というこの二つの反党的スローガンは、のちに、文学・芸術界のプロレタリア右派が気違いじみた攻撃をしかける主要な武器となった。一九六二年、一九六三年になっても、まだ「創作の自由を尊重せよ」といったふるいことばをつかつて、さまざま毒草を生きかえらせようとした者がいたではないか。

プロレタリア階級にたいするブルジョア階級の攻撃が凶暴になればなるほど、周揚の反革命的正体はますますはっきりと暴露された。ブルジョア右派のプロレタリア階級にたいする気違いじみた攻撃が高潮に達したとき、一九五七年四月九日、周揚は『文匯報』に談話を発表して、「上演種目の開放は演劇界における大きな出来事である」とおどろあがつて喜び、舞台上で乱舞する化物どもに勢いづかせた。また、右派分子劉賓雁らがソ連現代修正主義のところからもちこんできた「生活に干渉する」といった大毒草を大いにほめそやし、「生活のなかの消極的な現象をするどく暴露し、批判する作品が、ますます人びとの注目を引くようになってき

た」といった。四月、周揚は一連の会議をひらいて、さかんに扇動し、大いに「春寒」に反対し、「春暖」を要求し、右派が立ちあがつて「春」、すなわち資本主義復活の到来をちとるよう励ました。五月十三日、かれはある報告のなかで、共産党員は「特務と同じだ」とか、「でくのぼうだ」とかいつて気違いのように中傷し、当時、章伯鈞・羅隆基同盟の御用新聞であった『文匯報』が火を放ったことを、「肝っ玉が大きい」と極力ほめたたえた。かれは、何百万もの共産党員を殺せといっても、それが「かならずしも反革命分子だとはいえない」といった。毒牙をすっかりさらけだしてしまったのだ。このことは、かれが網の目をのがれた大右派分子であることを完全に立証したのである。

反右派闘争の火ぶたが切っておとされると、反革命二面派の手口をもてあそぶ周揚は、ただちに風向きをみて方向を変え、たくみに身をやつし、大右派の獍猛な姿をかくしてしまった。周揚と旧中央宣伝部の責任者は、整風がはじまったときは、丁玲・陳企霞反党集団の「冤罪」をそそぎ、かれらの反党のレットテルをはずそうとひじょうに熱心に、また積極的になり、ほこ先を直接毛主席をはじめとする党中央にむけてきたが、反右派闘争がはじまると、周揚は、ただちに丁玲・陳企霞・馮雪峰批判を利用して大右派分子である自分を左派であるかのよ

うにみせかけ、いかにも「一貫して正しかった」というポーズをとって、文学・芸術界の反右派闘争の総括に乗りだしたのである。「文学・芸術戦線での大論争」という文章のなかで、かれは、「われわれ」を「二種類の人間」にわけている。つまり、一つは「党と心を一つにしておらず」、「集団主義の精神で自己を改造しようとしぬい」ものであり、いま一つは、周揚自身であって、すでに「個人主義のふろしき包みをすてざり」、「党と心を一つにしている」のだそうである。例の悪どい右派の言論と対比してみれば、こうした二面派の手法がいかに卑劣であるかがわかるだろう。まえに、胡風反革命集団との闘争のなかで、周揚は二面派の手法をつかって投機をおこない、こんどは、丁玲、陳企霞、馮雪峰反党集団との闘争のなかで、また二面派の手法をつかって投機をおこなった。かれはこの二度の投機で、自己の罪悪をおおいかくし、一群の右派分子、裏切り者をかばい、逃げのびさせ、さらに、その黒い糸のなかの一味を文学・芸術界の各種の指導的地位にもぐりこませて、反党・反社会主義の勢力を拡大したのである。それだけではない。機に乗じてすべてをくつがえし、自分が三十年代に王明の右翼日和見主義を実行して、「国防文学」という投降主義のスローガンをうちだした歴史を改ざんし、逆に、魯迅は「セクト主義」だと中傷したのである。あれこれとどれだけ多くの手練手管をもちいたことだろう。

一部のもは、三部曲をかなでるのが好きらしい。全体を通してみると、周揚のなかでできたのも、もとをたせば、やはり三部曲であった。つまり、最初は、党と毛沢東思想に気違ひじみた攻撃をくわえ、そのあとですぐにニセの検討をおこなったり、積極分子であるかのようによそおったりして正しい側に立ち、それから、大いに報復と反攻に出、新たな攻撃をかけたのである。周揚の「一貫して正しかった」歴史とは、まさに反革命・二面派の歴史であった。だが、階級闘争の法則は人びとの意志によって左右することはできない。周揚は四回にわたる大闘争を逃げのびてきたが、五回目の大闘争で、三部曲をかなでおわらぬうちに、その反革命修正主義の正体を徹底的に暴露され、プロレタリア文化大革命のするどい剣でずたずたに切りきざまれてしまった。

嵐のなかで大暴露

一九五八年に社会主義建設の総路線がうちだされてからの歴史は、わが国の社会主義革命がいつそう深く発展してきた歴史である。この期間、毛沢東同志をはじめとする党中央のマルク

ス・レーニン主義的指導部と党内の反革命修正主義集団、ブルジョア反動路線とのあいだで、一九五九年と最近の二度にわたって、大闘争がくりひろげられた。そして、闘争のなかで、わが国の社会主義事業は、空前の偉大な勝利をおさめた。

この階級闘争の嵐のなかで、周揚をふくむ旧中央宣伝部、旧文化部、旧北京市委員会の指導者は、その反革命修正主義の正体をいっそう暴露した。周揚は、自分の勢力がいちだんと大きくなり、政治資本がいちだんと多くなり、それに、旧北京市委員会のフルシチョフ式野心家のうしろだてがあり、また、ブルジョア反動路線をうちだした人物の支持もあるので、いっそうほしいままにふるまうことができると考えた。こうしたまкруみのもとに、かれはボールをかなぐりすて、反革命の正体をすっかりさらけだして、いっそう悪どく、気違いのように、いたけだかになって党とプロレタリア独裁、毛沢東思想に攻撃をはじめたのである。

一九五九年一月、フルシチョフ修正主義集団によってソ連共産党第二十一回大会がひらかれた。そして、この大会で、フルシチョフは、わが国の総路線、人民公社、大躍進に悪どい中傷と攻撃をくわえてきた。フルシチョフ現代修正主義集団の支持のもとに、海瑞と自称する右翼日和見主義反党集団は、廬山会議で、徹底した修正主義の綱領をもちだし、毛沢東同志をはじめ

めとする党中央の指導をくつがえして、わが国を資本主義の暗黒の道へひきもどそうとたくらんだ。この過程で、周揚は、気違いのようにおびたらしい反革命活動をおこない、右翼日和見主義反党集団の政治的必要に積極的にかたえたのである。

一九五九年二月、周揚は『牡丹』二月号に、「洛陽の宣伝・教育幹部座談会における談話」を発表し、そこで、一九五八年の批判によって、「おさえつけられたという空気がうまれていく」が、いまはそれを一掃し、「人びとに大胆にものを言わせ、大胆に異なった意見を発表させるべきだ」といった。「人びと」は、階級的に区分されるものであるが、周揚の引っぱりだそうとした「人びと」とは、いったいどのような階級の人間なのであろうか。ほかでもなく、ひと握りのブルジョア右派である。プロレタリア階級とブルジョア階級、社会主義と資本主義のあいだでは、相手がこちらを圧倒するか、こちらが相手を圧倒するかのどちらかである。プロレタリア階級と広範な革命的人民がブルジョア階級に「おさえつけられ」るか、ブルジョア階級がプロレタリア階級と広範な革命的人民に「おさえつけられ」るかであって、階級的対立が存在する以上、「人びと」が平等であり、「人びと」が「おさえつけられ」ない社会などぜったいにない。プロレタリア独裁は、広範な革命的人民にたいしてはもともと広範な大民主を

実行するが、ひと握りの地主分子・富農分子・反革命分子・悪質分子・右派分子にたいしては、断固として独裁を実行する。敵にたいして独裁を実行しなければ、人民の民主的権利は保障されないのである。周揚の「人びとに大胆にものを言わせ」というのは、批判された化物どもを助けおこして、かれらが「ものを言」って毛沢東思想を攻撃し、党の総路線を攻撃することは許すが、プロレタリア階級が「ものを言」ってかれらを批判することは許さない、ということである。「少数のものにも、社会のある勢力を代表しているのであるから、ものを言わせなければならない」。これはまったく黒白をこたませにしている。「多数」と「少数」にたいしても、階級的な分析をくわえなければならぬ。確固とした左派と頑固な右派はいずれも少数である。右派はごく少数である。左派は中間派をかちとり、それと団結してはじめて多数になるのである。周揚はプロレタリア左派というこの「少数」を残酷に圧迫し、ごく「少数」のブルジョア右派を登場させ、かれらが権力を奪取するのを支持しているが、これは、かれらに革命的人民にたいして独裁をおこなわせることであるということにはあきらかである。

一九五九年の春、周揚は、化物どもを勇気づけて「大胆にものを言わ」すというかれの反動綱領を実行するために、周信芳に海瑞の上書⑤という題材を推せんし、そのうえ具体的資料を提供した。かれは周信芳にこういった。いま「みんなは大胆にものを言えないでいるから、このような芝居をやってみるのも必要だ」。「少数のもの」は、二人の反党分子の密談のときになると、「みんな」に変わってしまった。この「みんな」というのは、ほかでもなく、かれらを代表とするごく少数の地主分子・富農分子・反革命分子・悪質分子・右派分子のことである。かれは海瑞の上書⑥をつうじて、右翼日和見主義者とすべての化物どもを勇気づけようとしたのであった。一九五九年、かれはいたるところで「海瑞精神」を宣伝し、おまけに各地から北京にやってきた芸術団体の幹部や出演者を動員して、「こんにち歴史劇をえがく」うえでの主人公として、「海瑞、包公⑦をえらぶ」よう要求した。呉晗は、反党的な「海瑞の劇」をえがくには、「全国が一局の将棋」のようであればならないといったのではなかったか。この「一局」の指揮者は、ほかでもなく周揚であった。

一九五九年二月、周揚は創作活動の座談会で、大躍進を気違いのように攻撃し、卑屈にも現代修正主義の反動芸術を「国際的水準」であるといった。かれは、「一千万トンの鋼鉄をもつと、大したもんだと思いがかり、ソ連すら眼中におかなくなる」とわが党をののしった。偉大な七億の中国人民の「眼中」には、五大州の革命の嵐と全世界の階級的兄弟があるので、アメ

リカ帝国主義、現代修正主義をふくむ世界のすべての反動派をべっ視し、すべての化物どもと真っ向から闘争をすすめ、かれらを軽視し、かれらを圧倒し、かれらにうちかつことができるのである。だが、周揚の「眼中」には、なんんかの修正主義のごろつき仲間しかないので、なにもものをも恐れない中国人民にむかつて狂犬のようにほえたてるのである。かれはまた、わが党を「国際主義に反している」と攻撃した。これは、かれの「国際主義」が修正主義を「親父の党」とたてまつり、ソ連現代修正主義の尻について、動きまわるものであることを証明している。これは、プロレタリア国際主義とはまったくあい対立するブルジョア階級の奴僕主義である。

一九五九年の六、七月ごろ、周揚は、中国人民解放軍第二回文学・芸術合同演出大会の幹部座談会で報告をおこなった。この報告は、それからまもなく、右翼日和見主義分子が廬山会議でもちだした反革命路線とまったく同じ調子のものであった。かれは、われわれが大躍進をたええるのは「おしろいを塗るたくる」ことであり、「大衆の積極性を乱用する」ものであると中傷した。かれは、大衆運動を攻撃し、革命歌など「ばあさんが歌をうたうようなもので、聞けたものではない」とののしった。かれは、「詩をつくるにはインスピレーションが必要」

で、勤労人民に詩などつくる資格はないとののしった。かれは「中学生は、十二、三の赤子」であるから、政治に口をだす資格などまったくなく、かれらに政治学習をやらせたら、「政治に奉仕するということ」を俗流的に理解する」とののしった。話が大幅進や、労農兵が立ちあがって文化をにぎるなどの大衆運動のことになると、かれは嘲笑・諷刺し、あれこれと皮肉と攻撃の限りをつくした。これは、社会主義を憎悪し、革命的大衆を憎悪するかれのブルジョア階級の階級的本性からきたものである。大衆運動と正反対の側に立つこのような人間は、どのよう地位が高くて、結局は頭をぶつけて血を流すのが落ちである。事実が情け容赦なく周揚を反ばくした。いま、「ばあさん」から青少年にいたるまで声高らかに革命歌をうたい、「十二、三歳」の「中学生」や小学生も、かつてないほどの「積極性」をもって、プロレタリア文化大革命に参加し、ブルジョア階級にたいして全面的な総攻撃をくわえているのである。

この報告のなかで、周揚はさらに、「十年らい」、われわれ自身の「科学的な著作」があったらどうか、と狂暴に攻撃した。周揚は、解放後十年らいの、各方面における毛沢東思想の偉大な発展を一気に抹殺しようとしたのである。まことに「蚍蜉が大樹を撼るようなもので、笑うべき身のほど知らず」ではないか。周揚、頭をさげてよく聞くがよい。一九四九年〜一九五

九年の十年間、党中央はさん然と光りかがやく『毛沢東選集』を出版し、わが国と全世界人民の革命の指針となっているが、これでも「科学的な著作」がないというのか。この十年間、政治、軍事、哲学、文化、経済、党建など各分野において、毛沢東同志は、『人民民主主義独裁について』、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』、『中国共産党全国宣伝工作会議における講話』、『農業協同化の問題について』、『十大關係を論ず』……などの偉大な、画期的なマルクス・レーニン主義の著作をかき、マルクス・レーニン主義をいっそう天才的、創造的、全面的にうけつぎ、まもり、発展させ、マルクス・レーニン主義をまったく新しい段階に高めたが、これでも「科学的な著作」がないというのか。この十年間、毛沢東同志は、思想戦線における数度の偉大な闘争をみずから指導して、本文の第一部分で引用した、周揚を直接批判した重要な指示や、『映画と武訓伝』についての討論を重視すべきである、『文匯報のブルジョア的方向は批判されるべきである』などの有名な文章をかいたが、これでも「科学的な著作」がないというのか。周揚の反革命の正体は、これでもなおはっきりしないというのか。その実、一皮むけば、周揚たちの「科学的な著作」とは、現代修正主義のがらくたをかきあつめた臭くて長い「箇条」、「書物」、「教科書」であり、「口がとんがり、皮あつく、腹は

からっば」の大ぶろしきなのであって、周揚らの目には舶来の修正主義しがなく、毛沢東思想というこの無敵のプロレタリア革命の科学、毛沢東思想をつかんだ広範な大衆の生きた哲学、生きた科学には気違ひのように反対するのである。これは、旧中央宣伝部一味の反革命修正主義の罪惡的な本性を完全に暴露している。こうした罪惡を、全党はともに討ち、全国はともに誅さなければならない。

一九六一年から一九六二年にかけて、国内の資本主義勢力と封建勢力の社会主義にたいする攻撃は、高潮にたった。現代修正主義者は、アメリカ帝国主義、各国反動派と連合して、わが国、わが党にたいする封鎖、包囲、中傷、浸透、転覆に拍車をかけた。化物どもはつきつきととびだし、修正主義の逆流は一時氾濫した。周揚は、党、軍隊、政府ののつとりをたくらむ反革命修正主義集團の世論準備のために、文学・芸術界の化物どもを積極的にかきあつめるとともに、みずから狂ったように目を血ばしらせておどりだし、陣頭指揮の主将となった。かれはたてつづけに専門会議をひらき、つきからつきへと修正主義の綱領をほうりだした。かれはまた、上海、長春、杭州、大連、福州、廈門など全国をかけ回り、いたるところで会議をひらいて報告をおこない、四方に火を放ち、八方から風をまきおこして、化物どもが権力を奪取

し、「冤罪」をそそぐのを激励、画策して、毛主席に反対し、毛沢東思想に反対した。文学・芸術界の一群の反革命修正主義分子は、ほとんどみな周揚一味のところから通行証をもらって、周揚の信号弾をあいずに行動したのである。滅亡にひんしているすべての反動階級は、つねに欲に目がくらんで自己を完全に暴露するが、これは、革命的人民がかれらの正体を見破り、いっせいに立ちあがってこれを撃滅するうえで大變都合のよいことである。つぎにわれわれはいくつかのきわだつた面をあげることにしよう。

周揚は氣違ひのように毛沢東思想に反対し、悪ばをあびせた。周揚は一貫して毛沢東思想に反対してきたが、これまではつねに反革命二面派の手法をつかつてそれをおおいかくしてきた。ところが、一九六一年以降、かれは情勢が自分に有利になり、ブルジョア階級の復活の陰謀が実現可能になったと考えて、これまでのベールをかなぐりすてて陣頭におどりだし、あらんかぎりの悪ばをあびせはじめたのである。

一九六一年二月、上海にとんだ周揚は、ある座談会で、ある芝居は「毛主席に感謝する」ということを直接口にしており、しかも一度では足りないらしく、三度も四度も感謝している」と攻撃した。毛主席と共産党に感謝し、永遠に毛主席と党についていくことは、中国の数

億の勤労人民の心からの叫びであり、搾取階級の圧迫下から解放されたすべての勤労人民の永遠に忘れることのできない大事であるのに、周揚はなぜこれほど極度に憎悪するのか。これは周揚の反革命的な階級の本性を完全にさらけだしたものである。

一九六一年三月、周揚は福建省に出かけていき、毛沢東思想を大いにののしつた。かれは、「毛沢東思想は一本の赤い糸であって、それがあまり多くなると赤い糸ではなく、赤い布になつてしまう。政治は魂であるが、魂は肉体ではない……魂は場所をとらず、跡をのこさない」といった。周揚はこのように毛沢東思想を「跡をのこさない」、「場所をとらない」糸に変えてしまったが、これは、あきらかに毛沢東思想を各分野から追いだして、修正主義思想、資本主義思想ですべてを統率させようとするのではないか。この大いに毒をふくんだ黒い話を、かれは、何度しゃべつたかわからないほど、いたるところでしゃべりまくつた。

一九六一年六月、周揚は文学・芸術活動の座談会で、「放送やテレビで、あまり毛主席を擁護するなどというな」と強迫した。これは旧中央宣伝部の伏魔殿の黒い話である。これはかれの反革命の正体をじゅうぶんに暴露している。かれらは、「毛主席擁護」の宣伝に反対しているが、それではどんな人間を「擁護する」のか。全党・全国人民に吐きすてられたひと握りの

反党分子を「擁護し」て登場させ、反革命の復活を実現しようとするのか。このような悪だくみは、みじめな結末におわるだけである。

一九六二年七月、かれはこんどは東北へ出かけて行って、「毎日毛主席のことを話す」ことに反対した。われわれは毎日毛主席のことを話し、毎日毛主席の著作を読み、毎日毛主席の指示を復習し、毎日毛主席の思想を学ばなければならない。「毎日毛主席のことを話せ」ば、すべての化物どもはもぐりこむすぎがなくなり、頭をだせばすぐに見破られ、動けばすぐにつかまえられてしまうのである。

周揚は、毛沢東思想を骨の髄から憎む反革命修正主義分子である。かれの調子のよい話ほどこれもこれもごまかしである。この人間の正体がいかに反動的であるかを証明するのに、上にあげたいいくつかの資料ではまだ不十分だろうか。

周揚は、気違いのようになってすべての化物どもの「冤罪」をそそぎ、革命的人民にたいして反攻と報復をくわえ、うち倒されたさまざまな反革命分子、ブルジョア階級の「権威者」を激励、組織して党に攻撃をくわえさせた。

一九六一年三月十九日、「三家村」の反革命集団の『燕山夜話』⑥が登場した。それからわ

すか一週間後の三月二十六日、『文芸報』が急いで「題材問題」と題する特別論文を発表した。この文章は徹底した反革命修正主義の文芸綱領である。それは周揚、林黙涵の意をうけ、かれらの指導のもとに書かれたもので、しかもかれらがごまかく手をくわえたものであった。この文章は、「あらゆる方法で広く文の道をきりひらこう」という扇動的なスローガンをうちだした。

かれらは、いったいどのような「文の道」を「広くきりひらこう」としたのか。

抽象的な「文の道」などというものはない。社会主義と資本主義の二つの道のあいだには、食うか食われるかの闘争があるだけである。社会主義の文学・芸術の「文の道」を「きりひらこう」とすれば、資本主義の反動文学・芸術の「文の道」はふさがなければならない。資本主義、封建主義の反動文学・芸術の「文の道」を「きりひらこう」とすれば、社会主義の文学・芸術の「文の道」はふさがなければならない。かれらは、「広く文の道をきりひらこう」というのは、「すべての志のあるもの、才能のあるものが冷遇されたり、おさえつけられたりしないようにする」ためだという。たしかにそのとおりである。これは、かれらが「あらゆる方法で」、プロレタリア独裁のもとで「冷遇されたり、おさえつけられたり」している反革命分子

たちの「冤罪」をそそぎ、反革命の「志」をいだいている化物どもに、新聞・雑誌、文学・芸術を道具にして、ほしいままに反革命の宣伝をさせようとしていることを暴露している。反革命の復活には、「武の道」もあれば、「文の道」もある。われわれは、かならず「あらゆる方法で」、「文の道」から復活を実現しようとするかれらの夢を粉碎し、プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめなければならぬ。

周揚が各種の「座談会」で、いかにつきつきと、「おさえつけられ」ていた「志のあるもの」の「冤罪」をそそぎ、かれらが党を攻撃するのを狂気のように激励したかを見てみよう。

かれはブルジョア右派分子を熱狂的にほめたたえた。かれは、右派のなかにも「頭のよい人がおり」、ひじょうに「貴重である」、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に反対する青年たちでも、「ひじょうに学問があり」、「かれらの育成に気をくばら」なければならぬ、といった。かれは職権を利用し、さまざまな手口をつかって凶悪な、腐敗しきった反革命分子や右派を助けおこし、それを「宝」として自分の支配下にある各種の機構にもぐりこませ、高位・高給をあたえ、至れりつくせりの配慮をはらった。民族の大裏切り者であり、大ごろつきである周作人にも、月数百元をあたえて、かれが勤労人民の鮮血をすいとのに手を貸した。これ

とは逆に、周揚、林黙涵一味は、毛沢東思想の学習にはげむ青年、プロレタリア左派にたいしては、心の底から憎しみをいだき、「頭も、感情も、趣味もない」人間だとののしった。というのも、かれの考えている「頭のある人」というのが、毛沢東思想に反対し、社会主義に反対するブルジョア右派だからである。

かれは、胡風の反革命的言論に極力相づちをうち、胡風の「冤罪」をそそごうとしたが、これは、かれが胡風と同じ立場に立っていることを完全に暴露している。かれは、「胡風は、『機械論が中国の文学・芸術界を二十年間支配した。……もしわれわれがうまくやらず、百花斉放、百家争鳴の方針をつらぬかず、みな赤いけさをつけた大主教、修道女、修道士で、思想が硬化し、口をひらけばマルクス・レーニン主義、毛沢東思想をもちだすならば、だれでもカッとならざるを得ない』といったが、わたしは胡風のこのことばをずっとおぼえている」といった（一九六一年六月十六日）。これはなんと悪らつな黒い話ではないか。胡風は凶悪な反革命集團の頭目である。それにもかかわらず、周揚は胡風のことばを祖先の「家訓」のように「ずっとおぼえている」。それは、胡風がマルクス・レーニン主義を骨の髄まで憎み、毛沢東思想を骨の髄まで憎んでいるのをひじょうに気に入ったからである。「口をひらけば毛沢東思

想をもちだす」、この言葉にはねらいがある。毛沢東同志は「われわれの学習を改革しよう」のなかで、王明路線を固持しているものは「口をひらけばギリシアをもちだす」と批判したが、そのなかに周揚がふくまれていたので、周揚はこれにすつとうらみをいだいてき、いま、大いにのしりだしたのである。周揚が、「口をひらけば毛沢東思想をもちだす」ことに「カッとなる」のは、かれがブルジョア階級であり、外国買弁^{べん}であつて、口をひらけば外人をもちだし、「ベリンスキー、チュルヌイシェフスキー、ドプロリューポフ」をもちださなければ、すつきりしないからである。周揚はまた、胡風の「精神的奴隷のきまずあと」論を持ちあげて、作家に胡風の反革命理論にもとづいて、勤労人民の「立ちおくれ、迷信、偏見、嫉妬」などを大いに書き、勤労人民を戯画化し、侮辱するよう要求した。胡風を「批判」したことがあるなどというのは、すべてごまかしであり、ペテンである。また、「赤いけさをつけた主教」とか「修道女、修道士」とか「思想の硬化」とかいった胡風流の悪質きわまることばは、ほんとうに読むにたえないほど、はげしい憤りをおぼえる。周揚はこうした黒い話でプロレタリア左派に悪ばをあびせ、毛沢東思想を学ぶ労働者、農民、兵士に悪ばをあびせているが、これは、修正主義者であるかれの黒い心の人びとに見ぬかせるだけである。事実、「赤いけさをつけた主

教」というレッテルは周揚にかえしたほうが、すつとびつたりしている。当時、赤いけさをつけ、黒旗をかざし、文化戦線の指導権をにぎっていたのは、周揚たちではなかったか。

一九六一年六月、周揚はまた、「われわれは海瑞の上書の精神を養わなければならない」と主張した。これは、ちょうど公海瑞の免官^{めんくわん}が演出されてのち、「三家村」の「兄弟」たちが「門をつき破つておどりだし」、「失敗してももう一度やる決意」をもって攻撃をかけてきた時期であつた。周揚と文化部の前党组書記齊燕銘の指揮のもとに、公謝瑤環^{こうせやうかん}、公李慧娘^{こうりけい}など大量の毒草があいついでとびだしてきた。周揚は、大攻撃を組織し、ほこ先を党中央にむけ、右翼日和見主義分子の「冤罪」をそごうと、再三にわたつて「海瑞精神」を吹ちようした。一九六二年、旧中央宣伝部の主な指導者はまた、魏徵に学ぶよう提唱した。ひとり「海瑞精神」といい、ひとり「魏徵精神」^{ゑいけい}という、このように、かれらは反革命の共通のことばを見つけたのである。

周揚はまた、「まず、こうした支配するものと支配されるもの、改造するものと改造されるものとの関係を変えなければならぬ」といった。これは、周揚のねらいがプロレタリア独裁を「変え」、「支配され」ている反革命分子、胡風分子、海瑞、魏徵などを「支配する」者に

変え、いっせいに登場させて独裁をおこなわせ、気違いのように革命的人民を弾圧することだということ、はっきりと物語っている。

周揚は、いたるところでブルジョア階級の「自由化」を吹ちようし、各協会、各文学・芸術団体、機関をすべてペトフィ・クラブに変えようとした。周揚らが一九六一年七月にほうりだし、八月一日にふたたび手をくわえて配布した「当面の文学・芸術活動についての意見」（草案）、すなわち「文学・芸術の十カ条」は、毛沢東文学・芸術路線をくつがえし、毛主席をはじめとする党中央の文学・芸術にたいする指導をくつがえして、ブルジョア自由化を実現することを中心のねらいとしたものである。

「文学・芸術の十カ条」のなかで、「文学・芸術がいかに政治に奉仕するかという問題で」存在している「せまい、一面的な、正しくない理解」を攻撃しているが、これは周揚の黒い話をそのまま焼きうつしたものである。周揚がひどく恨んでいる「せまい理解」というのは、文学・芸術がしっかりとプロレタリア階級の革命闘争に奉仕し、文学・芸術をプロレタリア革命の思想的武器にすることである。周揚の「広さ」というのは、「十カ条」のなかでくりかえしわめきたてている「題材にたいしてはいかなる制限もくわえるべきでない」ということであ

り、「文芸報」が「題材問題」という特別論文のなかでのべている「世界の多様性や歴史の法則性、生活の複雑性を認識するように人びとを援助する」ということである。

「いかなる制限もくわえるべきでない」というのは、ペトフィ・クラブの反革命のスローガンである。いかなる事物もすべて一定の条件の制限をうけなければならず、「いかなる制限」もうけない事物など存在しない。問題は、革命的制限かそれとも反革命的制限か、進歩的制限かそれとも反動的制限かにある。プロレタリア階級の文学・芸術がプロレタリア階級の政治に奉仕するには、かならずプロレタリア階級の政治の制限をうけなければならない。すなわち政治が文学・芸術を統率し、自覚的にプロレタリア階級の政治的利益から出発して題材を考慮しなければならないのである。こうした制限をうけなければ、ブルジョア階級の政治の制限をうけることになり、ブルジョア階級の文学・芸術に変わってしまう。「昔のことよせて現在を風刺」し、「外国のものを崇拜して中国のものを否定する」毒草が、一時さかんにほびこり、「辭典背道」、「中間人物をえがく」などの反社会主義の悪質な映画、劇、小説がぞくぞくとびだしてきたのは、ブルジョア階級の反革命的な政治の結果である。「制限」の問題におけるブルジョア観念論のペテンをあばきだすことは、周揚の「いかなる制限もうけるべき

でない」というのが、実際には、文学・芸術に六カ条の政治的基準の制限をうけさせず、労働者、農民、兵士に奉仕するという制限をうけさせず、帝王将相、才子佳人、さまざまな大毒草に文学・芸術界を支配させ、反革命の大復活を実現するものだということを、はっきり見てもらうためである。

かれらの「世界の多様性」とは、実際にはただの一つで、腐朽、没落した地主分子、ブルジョア分子およびその知識分子らの多種「多様」な醜い姿を美化し、たたえようとするのである。周揚からみれば、プロレタリア階級の英雄的人物をつくりだし、労働者、農民、兵士のこのうえなく壮麗な生活をたたえることは、「せまい」ことであり、「単調」なことであって、ブルジョア階級の腐敗しきった生活様式を大いにえがくことこそ、「多様」なことであり、そこに「美の享受」があるのである。かれらの「生活の複雑性」とは、実際にはひじょうに簡単で、修正主義の文学・芸術のなかの赤軍兵士が反革命の匪賊軍と抱きあうといった階級協調論、階級投降主義であり、裏切り者、奴僕、ごろつき、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子を美化する修正主義の文学・芸術のけがらわしい手くだであり、搾取階級の陰うつな心理や精神分裂をもてはやす修正主義の文学・芸術の醜い筆法である。一九五九年、

フルシチョフは恥も外聞もなくシヨロホフをもちあげたとき、「人間の運命」の「偉大な意義」は「一般の人間の複雑で豊富な精神世界を表現している」ことにあるといった。フルシチョフの追随者たちは、われわれに「生活の複雑性」をえがくようにいつているが、それは、われわれにシヨロホフのような連中の裏切り者の文学に右へならへしろということではないだろうか。

周揚は現代修正主義の黒い商品を大いに売りさばき、「全人民の文学・芸術」という修正主義のスローガンをうちだした。一九六一年十月にはじまったソ連共産党「第二十二回大会」は、公然と「全人民の国家」、「全人民の党」を宣言し、ブルジョア独裁でプロレタリア独裁にடுத்துかわらせようとするかれらの裏切り者の正体をすっかりとさらけだした。周揚はさっそくこれに呼応した。かれは、一九六二年五月が、「延安の文学・芸術座談会における講話」発表二十周年であることを利用して、またも赤旗をかざして赤旗に反対する大陰謀をたらくんだ。かれは、手下のブルジョア階級の「権威者」を北京にあつめて、「文章を書く」、「経験を総括する」ということを口実に、毛沢東文学・芸術路線反対の風波をまきおこしたのである。この一味は、周揚、林黙涵の指導のもとに、貴族の大旦那の生活をおくり、朝から晩まで、いかに

左派に打撃をあたえるか、いかに党に反対し、社会主義に反対し、毛主席に反対するかの謀議をこらし、かずかずの人には見せられないようなきたないことをやった。そして、ついに「文学・芸術の隊列の団結、鍛練、向上」（『文艺報』社説）、「戦闘の二十年、勝利の二十年」（何其芳）、「人物創作のいくつかの問題について」（陳荒煤）、「映画創新問題の独白」（瞿白音）……など、反毛沢東思想の大毒草をとびださせ、毛沢東文学・芸術路線にたいして、全面的なきわめて悪い歪曲と攻撃にでた。周揚はみずから『人民日報』のある社説に手をつけた。三月十五日、周揚はある会議で、「社説」の内容にたいして詳細な規定を定め、基調を決めた。そのあとでこれにみずからこまかく手をくわえた。そして、これは「もつとも広範な人民大衆に奉仕する」という題で発表されたが、主な内容は、フルシチョフの「全人民の文学・芸術」でプロレタリア階級の文学・芸術にとつかわらせ、「人民全体」にたいする奉仕ということで、労働者、農民、兵士にたいする奉仕という毛沢東文学・芸術の方向をねじまげようとするものであった。

「全人民の文学・芸術」とは、周揚の一貫した修正主義の思想である。かれはくりかえし、「全人民の文学」、「全人民の文化」といったたぐいの修正主義のスローガンをうちだしてきた。ソ連共産党「第二十二回大会」ののち、周揚は、外国の主人の後だてがあり、また、反革命修正主義集団の頭目の許可もあると考えて、公然とこのスローガンを反党・反社会主義の綱領に変え、「人民日報」社説という形で、全党におしつけたのである。

この文章は、「労働者、農民、兵士を主体とする人民民主主義統一戦線内部の全人民が、みなわれわれの文学・芸術の奉仕の対象であり、活動の対象でなければならない」とのべている。これは毛沢東思想にたいするきわめて悪らつな改ざんである。毛沢東同志は、『延安の文学・芸術座談会における講話』のなかで、われわれの文学・芸術は、「なによりもまず、労働者、農民、兵士のためのものであり、労働者、農民、兵士のために創作され、労働者、農民、兵士によって利用されるものである」とひじょうに明確に指摘している。また、「活動対象の問題、すなわち文学・芸術作品をだれにみせるかという問題」では、「根拠地では文学・芸術作品のうけとり手は労働者、農民、兵士および革命の幹部である」と指摘している。労働者、農民、兵士に奉仕すること、労働者、農民、兵士を対象とすること、これは二十年らしいのプロレタリア階級の文学・芸術の根本的な方向であり、階級路線であり、文学・芸術の階級性を決定する根本的な条件である。社会主義革命の時期であるこんにちでは、なおさらそうである。周

揚は、いわゆる「統一戦線」で、文学・芸術の労働者、農民、兵士の方向をかえ、あくまでもブルジョア階級をわれわれの文学・芸術の奉仕の対象にしようとしているが、これはプロレタリア階級の文学・芸術の階級性をねじまげ、それをブルジョア階級の反革命の道具に変えようとするものである。周揚がブルジョア階級など革命の対象を「活動の対象」としているのは、われわれのブルジョア階級にたいする批判をブルジョア階級にたいする称賛に変え、この「全人民の文学・芸術」という修正主義路線で毛沢東文学・芸術路線をくつがえし、ブルジョア階級の復活のために「広く文の道をきりひらこう」とすることである。

この文章は、「作家、芸術家と人民大衆とのつながりを強化しよう」というスローガンをうちだしている。これはフルシチョフのところからそのまま持ちこんできた修正主義のスローガンである。フルシチョフは、「文学・芸術は人民の生活と密接なつながりをもたなければならぬ」という報告をおこなっている。ソ連共産党「第二十二回大会」で採択されたエセ共産主義の『ソ連共産党綱領』のなかには、フルシチョフのこの報告にもとづいてかかれた「文学・芸術発展の主要な路線は、人民の生活とのつながりを強化することである」ということがあつた。なぜソ連修正主義が、「人民の生活とのつながりをもつ」というスローガンをこのように

たたえ、それに熱中するのだろうか。それは、このスローガンが革命をなげすめて、反革命をもちあげているからである。第一に、このスローガンは、作家や芸術家を高々と貴族の大旦那の位置におき、かれらに「人民」と少しばかり「つながりをもつ」ことを要求するだけで、労働者、農民、兵士と結びつくことに真っ向から反対している。第二に、フルシチョフのいう「人民」とは、「全人民」のことであり、ブルジョア階級や高所得階級のことである。「人民」と密接なつながりをもつ」とは、ブルジョア階級や高所得階級と密接なつながりをもち、ブルジョア階級に奉仕することである。第三に、このスローガンは、文学・芸術活動家の思想改造を否定して、ブルジョア作家が自己のブルジョア世界観を完全に保持しながら、思う存分に反社会主義の反動作品を書くことができるようにしている。第四に、ペトフィ・クラブも「人民とのつながりを強化する」形態に変えることができるようにし、これによって、反革命組織や反革命活動を合法化している。周揚が現代修正主義の文学・芸術を「主要な路線」にするというスローガンを持ちこんできたのは、文学・芸術活動家は「長期にわたって、無条件に、誠心誠意、労働者、農民、兵士大衆のなかにはいり、はげしいたたかいのなかにはいらなければならぬ」という毛沢東同志の指示を否定して、修正主義路線に中国の文学・芸術界をいっそ

う支配させようとするためである。

もうたくさんだ。周揚は報告気遣いであるから、ここ数年らい、かれがおこなってきた数えきれないほどの大小の報告のなかの反動的な内容をいちいち挙げることは不可能である。だが、この一部分の事実からでも、じゅうぶんにかれの正体を見破ることができる。ふだんは二面派の姿であられる周揚も、このブルジョア階級のプロレタリア階級にたいする攻撃の嵐のなかで、その反革命一面派の本質を完全にさらけだしてしまった。しかし、「物事はいくところまでいくとかならず反転する」ものである。反革命派の怪気炎がじゅうぶん暴露されることは、逆に、革命派の反撃のために、致命的な打撃をあたえる弾丸を提供することになる。周揚一味は、こうして自分で自分をたたきつぶす条件をととのえたのである。

黒い糸の頑強な抵抗を粉碎して、

プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめよう

一九六二年九月の党の第八期中央委員会第十回総会の前夜になっても、周揚はいいかわらず毛主席と党中央に反対する陰謀活動に積極的に参加していた。かれはひと握りの反党野心家と

グルになって、反党分子高崗の「冤罪」をそごうとする反党小説『劉志丹』の出版を積極的に支持し、激励した。かれはこの小説を書いた反党分子と会い、この小説にみずから目をおし、この小説は「一つの模範を示した」、「一つの手本をつくれた」とほめそやした。かれらは、この小説をつかって、高崗の反党の罪悪を洗い流し、党史を改ざんし、毛主席をはじめとする党中央の高崗・饒漱石反党同盟にたいする正しい結論をくつがえそうとしたのである。

かれらの反党の陰謀は、いちちやく党中央と毛主席に見破られてしまった。毛沢東同志は、偉大な歴史的意義をもつ党の第八期中央委員会第十回総会で、ふたたび社会主義社会における矛盾、階級、階級闘争についての理論を強調し、直接、周揚らを批判した。

毛沢東同志はつぎのように指摘した。小説を利用して反党活動をおこなうというのは、一大発明である。政権をくつがえそうとすれば、まず世論をつくらなければならず、まずイデオロギー面での工作をおこなわなければならないのがつねである。革命的な階級もそうであり、反革命的な階級もまたそうである。

毛主席と党中央は、周揚らにたいして、ふたたびきびしく批判し、かれらが改めるのを辛抱よく待った。だが、周揚はまたもや反革命二面派の口舌をもちいて、毛沢東同志の指示を拒

絶した。第十回総会ののち、かれは職権を利用し、党、政府、軍隊にまぎれこんで重要な職務をかすめとっていた反党野心家の支持をたよりに、左派の反撃をおさえ、ふたたび二面派の手くだを弄して、反党・反社会主義の黒い系の勢力を保持し、ひきつづきプロレタリア階級に對抗しようとした。そこで、広大な思想の陣地では、食うか食われるかの争奪戦があいついで展開されたのである。

一、党の第八期中央委員会第十回総会がおわるとすぐに、周揚は自分の反党の罪行をおおいかくすために、一九六二年十月十九日、文学・芸術活動座談会に参加した人びとにあわてて「伝達」をおこなった。かれは一方では、自分を「精神的準備がじゅうぶんであるとはいえない」左派にしたてあげておいて、他方では、第十回総会の精神をねじまげ、文学・芸術界の「基本的状況はよい」、「反党・反マルクス主義のものは、……多くはない」といって、おびただしい大毒草を香りのよい花だといいくるめ、革命的人民をマヒさせようとした。かれはまた、「他の極端に走ってもならない」といった。これは、ブルジョア階級を批判してはならない、毒草を取りのぞいてはならないということである。プロレタリア階級が反撃に出ようとすると、かれは最後まで抵抗する決意をかためた。

二、つづいて、一九六二年十一月、周揚の批准と指示、そして、かれみずからの画策のもとに、山東省で、「孔子討論会」なるものがひらかれた。これは、周揚が化物どもと結託して、第十回総会の革命的精神にたいしておこなった反撃であった。これは、ブルジョア右派が大いに気炎をあげた黒い会であり、かれらは、解放いらい一度もなかった、封建祖先をうやまうという醜い劇を演じたのである。

三、一九六三年元旦、柯慶施同志は、党の第八期中央委員会第十回総会の精神と毛沢東同志の指示にもとづいて、上海の文学・芸術活動家に「十三年を書く」ことを提案し、文学・芸術創作が十三年らしい社会主義革命と社会主義建設の現実を大いに反映し、労働者、農民、兵士のなかの英雄的人物を大いにたたえるよう希望した。この革命的な提案は、たちまち周揚をかしらとする文学・芸術界の修正主義集団の抵抗と攻撃をうけた。一九六三年四月、中央宣伝部の招集した文学・芸術活動の会議において、周揚は林黙涵、邵荃麟らを組織して、グループ会議においても、大会においても、「十三年を書く」という呼びかけに包囲攻撃をくわえた。この会議とこれにつづく四月二十七日の全国文学芸術界連合会拡大委員会において、周揚はみずからのりだして、「どのような題材をえがいても時代精神を反映することができる」、「現在

をえがくことだけが、主導的であると考えてはならない」と大いにぶちまかった。ところが、一九六五年の末、青年業余作家に報告をおこなったとき、かれは顔をこわばらせて、「三年まえ」に、「十三年を書く」ということがいわれたとき、「ある同志は、これをうけいれることはできないといった」と批判した。まるで自分は当時積極分子であったかのようなのである。これはまったくの偽りである。どうしてこのようにあつかましく、ウソで自分を吹ちようすることができるのだろうか。

四、一九六三年上半期、毛沢東同志は、「幽霊劇」、「帝王将相、才子佳人」などにたいして、鋭い批判をくわえ、周揚、齊燕銘、夏衍、林默涵の指導する文化部は「帝王将相、才子佳人部」である、ときびしく指摘した。周揚は、一九六三年八月と十月の二回にわたる演劇活動についての談話のなかで、「幽霊劇の上演を主張することは、かならずしもブルジョア思想ではない」といい、必死になって毛主席の批判に対抗した。周揚はまた、かれがたよりとする反党野心家の謬論にもとづいて、公然と「分業論」をうちだし、「とくに京劇は、帝王将相を表現するうえで適している」といって、革命的現代劇に反対する理論的根拠をデッチあげた。かれはさらに、演劇改革はすでに「大きな成績」をあげていると吹ちようして、帝王将相、才子

佳人に舞台を支配させていた犯罪行為をおおいかくそうとした。

五、一九六三年十月、周揚は哲学社会科学部拡大会議で報告をおこなった。かれは、この報告の第三の部分で国内の任務についてのべているが、当時の思想戦線における重大な戦闘任務については、まったくふれておらず、逆に、「歴史遺産の整理と研究」について大いに語った。そして、旧中央宣伝部の一味の黒い話をもちだしてきて、「単純な方法でみだりにレッテルをはりつける」ことに、必死になって攻撃をかけた。「レッテル」というのは、階級分析のことである。かれは会議で左派を排斥し、おびたしい修正主義者、ブルジョア階級の「権威者」をかつぎだして、この会議を牛耳った。歴史組で「修正主義反対の報告」をおこなったもののなかには鄧拓もいたのである。鄧拓を「修正主義反対」の指導にあたらせるなど、まったくふざけたことではないだろうか。いや、それどころか、政治的取り引きである。周揚が反革命の野心家にすがりつくには、その手下の「三家村」を支持しなければならなかったからである。

六、一九六三年十二月、文学・芸術界にたいする反党の黒い糸の反動的支配にたいして、毛主席はふたたびつぎのように鋭く指摘した。各種の芸術形態——演劇、演芸、音楽、美術、舞

踊、映画、詩、文学などには問題が少なくなく、その人数も多く、多くの部門で、社会主義的改造は、いまだに、「ごくわずかな効果しかあげていない。多くの部門はいまなお「亡者」が支配している」と。毛主席はさらにつぎのようにのべた。多くの共産黨員が、封建主義や資本主義の芸術の提唱には熱心でありながら、社会主義の芸術の提唱には不熱心であるというのは、奇怪千万なことではないか。この指示は、上にのべた周揚の吹ちようする演劇の「大きな成績」というたわ言に、真正面から一撃をくらわして、周揚の反動的立場を徹底的にあらばきだした。ところが、周揚はひきつづき詭弁まげを弄して、逃げのびようとした。一九六四年一月、周揚はある会議で公然と毛主席の指示に反対してこういった。「文化部のあやまりは、かならずしも路線のあやまりではない」、「文学・芸術部門の指導的メンバーとわたし自身をふくむ大多数の人は認識の問題である」。このように「ふく」めてしまえば、かれらは二言三言の検討をおこなって、正しいものに変わるという反革命二面派の手口をふたたび弄することができる、と周揚は考えたのである。

七、周揚らが再三にわたって中央の指示に反抗するので、一九六四年六月、毛沢東同志は、いま一度、文学・芸術界の修正主義の指導者をきわめて鋭く批判し、周揚らに嚴重な警告を

発した。これがつまり、本文のはじめにふれた、周揚に改ざんされたあの指示なのである。形勢は不利であり、これ以上反抗していけば自分がやられる危険があると感じた周揚は、文化部で「整風」なるものをおこなった。これは、大衆をあざむき、左派をおさえつけ、悪人をかばい、自分をまもるニセの「整風」であった。一九六四年十一月、周揚はある「報告」のなかで、夏衍らにたいする「批判」を利用して、自分は延安の文学・芸術座談会以来ずっと「主席の教えにしたがって仕事をしてきた」と大いにふきまくり、「わたしのあやまりときみたちの路線のあやまりとはちがう」、「経験がなかったのだ」といった。周揚にたいして批判することは許されず、また、他のものを批判するばあいでも「指導」がなければならぬ。つまり、「なんでも」かれら反革命修正主義の「指導者」の「批准」を「経なければならぬ」のである。これは、「阿Q正伝」にでてくる、革命を許さないニセ毛唐の手口である。

八、毛主席の配慮のもとに、一九六四年七月、全国京劇現代もの競演大会がひらかれた。一貫して革命的現代もの京劇に反対していた周揚とその黒幕は、とつぜん熱心であるかのようなポーズをよそおって出てきた。周揚はまたもや「総括発言」という役割を演じた。何度も手をくわえられたこの演説は、なんとかして革命的なものに見せかけようとしているが、それでも

やはり馬脚をあらわした。かれは、京劇革命について夏衍が香港の新聞記者に歪曲して発表した談話を、「京劇が現代ものを演ずるということについての考えが不十分だ」といい、さらに「余謝瑤環々全体が反動的だといっているのではない」と公然と語り、田漢の反革命的罪行をなんとかしてぬぐい去ろうとした。

九、一九六五年のはじめ、毛主席のよびかけのもとに、楊獻珍、周谷城の反動的観点と悪質映画にたいする批判がくりひろげられた。これらの批判が深まり発展していけば、自分の反革命的支配に危険がおよぶことを十分に知っていた周揚は、あらゆる手をつかってこれを消しとめようとした。かれがつかつたのは、やはり反革命二面派の例の口口であった。つまり、一方では批判に賛成するかのようによそおいながら、他方ではすきをうかがい、時機を見て、運動を右旋回させることであった。二月下旬、まさに批判が高潮にたつたとき、周揚、林黙涵は、ただちに「総括」を口実に、北京にいくつかの主要新聞・雑誌の責任者を集めて、この時期に発表された各種の毒草批判の文章を「から弾をうっている」とか、「分析に欠けている」とか、「教条主義である」とか、「邪推だ」とか、「大げさである」とか、「レットテルばかり張りつけている」とかいつて、すごい剣幕で非難し、氣違いのように反撃をくわえた。かれらは

また、労働者、農民、兵士大衆の評論を「單純である」とか、「専門家の評論にとつてかわることはできない」といつて、これを攻撃、嘲笑し、労働者、農民、兵士の批判に打撃をあたえようとした。かれらは公然と、「夏衍や田漢らを批判するには、過去と現在とを区別しなければならず、政治と学術とを区別しなければならぬ」といい、また、「一部のことは、もう言っていないのであるから、……これ以上ふれる必要はない」といつた。「区別する」、「これ以上ふれる必要はない」、これは、毛沢東同志がおこした文化革命にさかねじをくわすものであり、ブルジョア階級にたいする批判に、強引にブレーキをかけようとするものである。はたして、この計略は効を奏して、ブルジョア階級を批判する大量の文章が、かれらの伏魔殿のなかに押しこめられてしまった。

十、一九六五年九月、周揚らは、すでに革命的大衆をおさえつけ、足下も固まったので、三部曲の第三番目の曲をかなでることができると考えて、さっそく、党にたいして反撃と報復に出てきた。かれらは北京で全国文化局（庁）長会議をひらき、周揚とかれの黒幕がいっせいに登場して、氣違いのように毛沢東同志を中傷したのである。かれらはまた、夏衍、陽翰笙らを議長席にまねき、横柄に腰をおろして、ひきつづきプロレタリア階級にたいして独裁をおこ

なった。周揚は報告のとき、くりかえしかれらにいたわりの声をかけた。「自分が批判されたことをいつまでも気にしないでほしい。批判が少し多いとか、たりないとか……批判が少しひどすぎるとか、軽すぎるとかということは、どうしてもありがちなことだ」。これは、批判が「多」すぎたり、「ひど」すぎたりすれば、それを返上してもよいのだ、周揚が倒れないかぎり、きみたちもだめになるようなことはなく、いずれ再起できるのだ、とかれらに暗示したのである。そして、またもや自分は「気づくのがひじょうにおそく、正すのがひじょうにおそかった」、これは「認識の問題」にすぎないといいくるめた。こうすれば、かれら一味をみな守つてのがすことができ、ひきつづきプロレタリア階級にたいして独裁をおこなうことができる考えたのである。

十一、最後に、一九六五年十一月二十九日、周揚は全国青年业余文学創作活動家大会で報告をおこなった。これは、公海瑞の免官にたいする批判がくりひろげられてから十九日後のこと、プロレタリア左派とブルジョア右派とが食うか食われるかの闘争をすすめていた重大な時期であった。旧北京市委員会、旧中央宣伝部、旧文化部のひと握りの反革命修正主義分子は、毛沢東同志のブルジョア階級の代表者批判についての指示にあくまで反抗するため、一連の反

党・反社会主義の陰謀活動をすすめて、気遣いのように左派に打撃をくわえ、右派をかばい、目の前に迫ってきたプロレタリア文化大革命の烈火を消しとめようとした。この重大なときに、周揚は一步もゆずれぬ決意をかため、毛沢東同志の徹底的に革命をすすめてよという指示に反抗してきた。報告のなかで、かれは、公海瑞の免官の批判などこの世のなかにまったくないかのように、目の前の嵐のような闘争にはひとこともふれなかった。一九六六年一月、周揚の報告が正式に発表された。このときは、かれが報告をおこなった日からすでに一ヵ月余りがすぎしており、この間、革命的人民による公海瑞の免官の批判の闘争は一步すすんでくりひろげられており、ひと握りの反革命修正主義者は最後の抵抗をこころみていた。周揚は、公表した報告のなかで、ひきつづき公然と毛沢東同志の指示を改ざんし、あくまで抵抗する決意を表明したのである。

同志たちに見ていただきたい。かれらはいかに頑強に党中央と毛主席の指示に抵抗しているか。かれらはいかにプロレタリア左派にたいして骨の髄まで憎しみをいだいているか。革命の炎がかれらの頭上にせまってきたているが、かれらは焼き殺されても後退しようとしなない。かれらは黒い糸、黒い店のすべての力を動員して反撃しようとしている。

解放いらいの文学・芸術における闘争の歴史をふりかえって見るとき、そこに二つの路線の鋭い闘争をはっきりと見てとることが出来る。つまり、一つは毛沢東文学・芸術路線の赤い糸で、毛沢東同志は、みずから数度にわたる重要なたかいたかいを指導して、文化革命を一步一步おしすすめ、長期にわたって準備をととのえ、すさまじい勢いの、ブルジョア階級にたいして全面的な攻撃をしかける、何億もの人民が参加するプロレタリア文化大革命をおこして、周揚一味の巢を掘りくずしたのである。もう一つは反党・反社会主義のブルジョア文学・芸術路線の黒い糸である。その総元締めは周揚である。周揚のうしろには、最近粉碎された、党、軍隊、政府ののつとりをたくらむ反革命集団があった。胡風、馮雪峰、丁玲、艾青、秦兆陽、林默涵、田漢、夏衍、陽翰笙、齊燕銘、陳荒煤、邵荃麟などは、みなこの黒い糸のなかの人物である。かれらの内部のそれぞれの集団のあいだには、さまざまならそいや排斥があったが、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想に反対する点では一致しており、労働者、農民、兵士大衆に反対し、党、社会主義に反対するブルジョア階級の反動的な政治的立場では一致していた。胡風を「批判」する周揚が胡風の罵詈雑言（ばりぞつごん）を用いたのも、もともとかれらの立場が一致していたからである。周揚一味は、打撃をあたえたりひきずりこんだり、高職や利益でつたり、投

降分子や裏切り者をだきこんだり、互いにおだてあつたりするなどの卑劣な手段をつかつて、裏切り者、反革命分子、右派分子、極端的な個人主義者をかきあつめて、さまざまなポストにおくりこみ、反党・反社会主義の道具にしてきた。かれらはまた、さまざまな手をつかつて、青年を毒してブルジョア階級の継承者にしようと思命になり、犯罪的にも一部の青年作家を反党・反社会主義の黒い店に引きずりこんできた。この黒い糸は、文化界を支配し、各協会を支配し、さらに各地に手をのばして、「会員」制度や幾重もの「協会」組織をつかつて、大量のブルジョア作家をやしない、労働者、農民、兵士を排斥し、打撃をあたえ、大小さまざまな「ペトフィ・クラブ」をつくってきた。この黒い糸は資本主義復活に奉仕するものである。いま、われわれはかれらのすべての「ペトフィ・クラブ」をぶちこわさなければならず、かれらの修正主義の伏魔殿をたたきこわさなければならぬ。われわれはすべての文学・芸術部門の指導権をブルジョア階級の手から奪いかえさなければならず、徹底的に奪いかえさなければならぬ。そして、腐敗しきった資本主義的關係、封建主義的關係を断固としてぶちこわさなければならぬ。

周揚は、「マルクス主義の理論家」と自称していたのではなかったか。周揚は文化の面での

党の指導的ポストをかすめとり、しかも党閥、学閥の地位を利用して、文学・芸術の面での党の代表であるかのように装い、たえず自分を吹ちようし、他人をおどしつけて、このような仮象をつくりだしてきたのである。事物は過程として展開されるものであって、現象をとおして事物の本質を認識するには、しばしば観察の過程が必要であり、かくれている本質が十分に暴露されるには時間が必要である。これはなにも不思議なことではない。こうした状況は過去にもあったし、今後もまたおこるだろう。しかし、反毛沢東思想の「大物」たちの正体が暴露されてから、かれらの歴史をみてみれば、大きな仮象のなから小さな本質をみつげることができる。周揚の公表した文章や内部での談話をくわしく調べてみれば、反動的な謬論で満ちており、まちがいだらけで、すぐに見破られるものである。周揚の「文学・芸術理論」にいたっては、洋書のなからいくつかのくだらぬ語句をかきあつめてきたものにすぎない。なにも大したものはないではないか。

周揚は、自分は「解放区」からきたと吹ちようしたのではなかったか。実際には、延安にいたとき、かれと王実味、丁玲、蕭軍、艾青などのトロツキスト、裏切り者、反党分子とは、まったく同じものであった。周揚は革命の隊列にまぎれこんできたブルジョア分子である。三十

年代には、周揚は王明路線の執行者であり、魯迅に代表されるプロレタリア文学・芸術路線の反対者であった。四十年代のはじめ、かれは延安で、「美学では、わたしはチェルヌイシェフスキーの忠実な信奉者である」（一九四一年七月十七日づけの『解放日報』）と頑強に宣言していた。かれは革命の根拠地にやってくるながら、革命の根拠地を極度にきらっていた。一九四一年七月十七日から十九日にかけて、かれは「文学と生活漫談」という反党雑文を『解放日報』に発表し、「延安にもやはりそれ自身のわくがあり、やり方がある。みな同じような制服を着、同じぐらいの手当をもらっている、……道を歩いていれば、前後左右いたるところから、人びとの口にするきまりきった革命の術語がきこえてくる。すべてが同じで、なんの変化もない」と中傷し、攻撃した。かれはブルジョア「反対派」の反革命的なことで、延安は「せますぎる」、「あまりにも単調だ」、「自分を入れきれない」と攻撃し、狂気のあまりに、「延安も、いままでの自分のやり方に満足してはならず、より広い、すべてのものを網羅するものになるように、改善につとめなければならない」と要求した（一九四一年七月十九日づけの『解放日報』）。これは、毛主席のいたところ、全中国人民のあこがれる革命の聖地——延安で書いたものである。その悪らつきは、王実味のそれとまったく同じである。プロレタリア

階級が権力をにぎっているところにやってきて、周揚のブルジョア本性が爆発して、憎しみのこもった反党のわめきとなったのである。「すべてのものを網羅する」とは、化物どもも「網羅」するということである。はたして、周揚のこの三編の反党雑文が手びきとなって、王実味の「野生の百合」、丁玲の「三・八婦人デー所感」、艾青の「作家を知り、作家を尊重する」を「網羅」した大量の反革命のあやしげな文章がとびだしてきた。周揚のこうした反動的な立場と思想は、毛沢東同志の『延安の文学・芸術座談会における講話』の鋭い批判をうけた。だが、かれは一貫して毛沢東同志の批判に反抗し、あくまで労働者、農民、兵士と結びつこうとはしなかった。そして、いくら批判されてもあらためられないこうしたブルジョア階級の反動的な本性は、社会主義革命の時期になると、さらに全面的な修正主義路線へと発展したのである。

周揚は反革命二面派である。かれが長期にわたって一部の人のとをあざむくことができたのは、かれのこうした二面派の口口と大いに関係がある。われわれは、二面派の人物を見分けることができるようにならないければならない。二面派とは、プロレタリア階級の内部にまざれただけ敵がわれわれと闘争をすすめるうえでの一種の戦術であって、強大なプロレタリア独裁のもとでは、かれらは赤旗をかざして赤旗に反対する方法をとらなければいけないのである。陰と陽、裏と表があり、使うのはマルクス主義の語句で、売りさばくのは修正主義の黒い商品であり、不利なときには退却し、有利なときには攻撃し、にせの検討で身をかくし、真の攻撃で反攻に出、投降分子や裏切り者をだきこんで、私党を結成し不正をはたらき、プロレタリア独裁をくつがえして、資本主義の復活を実現するのを最終目的とすること、これがかれらの全戦術なのである。こうした二面派を見分けるには、重大な時点でのその政治的立場、とくにブルジョア階級がプロレタリア階級にたいして気違いじみた攻撃をかけてきたときのその政治的立場を見ることが必要で、風向きによってかわるような表面的な文章を信じてはならない。こうした二面派をあばくには、大衆運動にたよるべきである。このプロレタリア文化大革命の烈火は、周揚のペールを焼きはらって、その醜悪な魂をあばきだしたではないか。

では、周揚のこの黒い糸を摘発したならば、文学・芸術界はすべてがうまくいくのだろうか。そうではない。摘発したということは、掘りくずしたということではなく、影響を一掃したということではなおさらでない。この黒い糸を掘りくずしても、これからもまた黒い糸があるだろうし、またそれと闘争しなければならぬ。階級闘争、政治闘争は、つねにあれこれ

の形態で文学・芸術面に反映してくるものである。たたかひの道はまだまだ長い。真のプロレタリア革命派は、情勢の発展とともに、たえず自分に新たな、より高い闘争任務を提起すべきであつて、けつして、一つの戦役の勝利にマヒしたり、それに酔つたりしてはならない。

まさに毛沢東同志がのべているように、プロレタリア文化大革命は人びとの魂にふれる大革命なのである。それは、人びとの根本的な政治立場にふれ、人びとの世界観のもつとも深いところにもふれ、一人ひとりのあゆんできた道とこれからあゆむ道にふれ、また、中国革命の全歴史にふれる。これは、人類がこれまで経験したことのないものなかつたもつとも偉大な革命の変革であり、一代の強固な共産主義者をきたえあげるであろう。いまはひじょうにすばらしい情勢であるが、闘争の道は曲がりくねつたものである。反復や起伏があり、さまざまな仮象や、反動勢力の反撃、軟化に出会うだろうから、さらに何回かやりあう用意をしておかなければならない。しかし勝利はかならず、毛沢東思想を掌握し、よく学習をし、大衆と団結し、最後まで革命をやりぬくプロレタリア革命左派のものである。「実践、認識、再実践、再認識」、毛主席のこの教えをまじめに実行し、りつぱに経験を総括し、われわれの認識を客観的過程の発展とともに発展させていきさえすれば、われわれは敢然と革命をやり、りつぱに革命をやる真の腕

を身につけることができる。この文化大革命の激流に洗い流されるのは、旧世界のひと握りの残渣であり、搾取階級が残してきたさまざまな腐敗した制度と精神的なカセである。中国人民は、偉大な指導者毛沢東同志の指導のもとに、これまでにもましてしっかりと団結して、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、革命の大きな足どりで、生氣はつらつと、真紅の共産主義の新しい世界をつくりあげるであらう。

注

① 武訓（一八三八年～一八九六年）は清朝時代の人で、大地主、大高利貸し、大ごろつきである。ところが反動映画『武訓伝』は、かれを貧しい農民の子弟に教育をうける機会をあたえるために自分を犠牲にすることすらいとわなかつた「偉大な人物」としてえがきだしている。

② 『「紅樓夢」研究』の著者はブルジョア階級の学術「権威者」俞平伯である。『紅樓夢』は中国の古典小説の一つである。俞平伯は『「紅樓夢」研究』のなかで、ブルジョア観念論とスコラ的考証方法をもちいて、『紅樓夢』を論証している。一九五四年九月、『「紅樓夢」研究』にたいする批判が全国的にくりひろげられた。これはイデオロギーの領域におけるプロレタリア思想のブルジョア思想にたいする闘争であり、ブルジョア観念論にたいする闘争であつた。

⑧ 今清宮秘史は徹頭徹尾の売国主義の映画で、一九五〇年三月、まず北京で上映された。この

映画は、一方では恥知らずにも、外国帝国主義に屈従する奴隷根性を宣伝し、光緒皇帝と地主階級のなかの王党派を美化し、「外国人」の侵略にたよって「皇帝を助けて皇位に復させ、朝廷の再興をはからなければならぬ」と狂気のようにわめきたてている。他方では、帝国主義と英雄的にたたかった義和団を「殺人・放火をはたらく」「狂った悪魔のような」「拳匪」であると狂気のように中傷し、悪ばのかぎりをつくしている。この映画はアメリカ帝国主義とまったく調子をあわせたもので、完全にアメリカ帝国主義の中国侵略の必要にこたえ、アメリカ帝国主義の手先の反革命復活の必要にこたえ、毛沢東同志の「幻想をすてて、闘争を準備せよ」という偉大なよびかけに対抗したものである。ところが、この売国主義の映画が上映されると、すぐに資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派によって鼓吹され、批判されるどころか、かえって「愛国主義」の映画だとたたえられた。毛沢東思想に反対し、ブルジョア反動路線を實行していた一部のものは、この映画にたいする批判を極力妨害した。これからみても、かれらが「愛」しているのは、実際には地主、ブルジョア階級であり、かれらが問題を觀察するうえで用いているのが、地主、ブルジョア階級の史的觀念論であり、かれらこそ真正正銘の「王党派」であることは、ひじょうに明らかではないか。現に今清宮秘史を称賛した「大

物」のなかには、このプロレタリア文化大革命のなかでブルジョア反動路線をうちだしたものがふくまれている。毛沢東思想に反対するかれらの反動的ブルジョア世界観、搾取階級をまもり、革命的大衆運動を憎むかれらの本質は、はやくも建国の初期、今清宮秘史をもちあげたときにあらわれていたのである。

④ 「胡風反革命集団」は文学・芸術界にひそんでいた反革命組織で、その頭目は胡風である。かれは裏切り者で、のちに革命の隊列にまぎれこんできたのである。解放後、かれは文学・芸術界で黒い一味をかきあつめて反革命活動をおこなっていた。一九五四年、かれは党中央に三万字ののぼる「意見書」を提出して、党の文学・芸術方針と毛沢東文学・芸術思想に悪どい攻撃をくわえた。一九五五年五月六月、「人民日報」は、胡風反革命集団にかんする三つの資料をあいづいで発表して、この集団の反革命の陰謀を徹底的に暴露し、粉砕した。

⑤ 海瑞（一五一四～一五八七年）は明朝時代の役人である。かれは、当時の封建地主階級の農民にたいする独裁を強化するため、また封建地主階級の利益を保護するために、皇帝——明朝の世宗に『治安疏』を上書し、皇帝が道教にまよい朝政をつかさどらなかつたことを批判した。このためかれは投獄された。

⑥ 包公すなわち包拯（九九九～一〇六二年）は北宋時代の役人である。封建支配階級は、人民を

あざむき、階級矛盾をおいかくし、階級的区分をまっ殺するため、包公を「清廉な官吏」として美化し、これによって人民を麻痺させ、被抑圧、被搾取階級の闘志をにぶらせようとした。だが、包公は実際にはまぎれもない封建支配階級の忠実な擁護者であった。

⑦ 『三家村』は、鄧拓、吳晗、廖沫沙らの反革命修正主義分子によって組織された反党集団である。この集団は、かれらの支配下にあった旧北京市委員会の刊行物『前線』に、『三家村ノート』という形式で文章を発表し、党中央、毛主席を攻撃し、毛沢東思想、社会主義制度を攻撃し、狂気のように一連の反党活動をおこなった。

⑧ 『燕山夜話』は、反党・反社会主義・反毛沢東思想の大毒草である。著者は馬南邨つまり反革命修正主義分子鄧拓である。この本は雑感小品を書くということを口実に、暗ににわした悪どい言葉をもちい、あてこすりの方法で、党と毛主席を攻撃し、三つの赤旗と社会主義制度を攻撃するとともに、封建主義、資本主義、修正主義の毒素を大量にばらまいて、資本主義復活のための世論をつくった。

⑨ 公海瑞の免官は、反革命修正主義分子吳晗が書いた反動的な歴史劇の脚本である。公海瑞の免官は実際には、古人をかりて人民に「官職」を「罷免」された右翼日和見主義分子の「冤罪」を訴えたものであり、人民に「罷免」された右翼日和見主義分子の再起をうながすことが

その真のねらいであった。

⑩ 公謝瑤環は、反党分子田漢が書いた歴史劇で、反党・反社会主義の大毒草である。劇中の主人公謝瑤環は、唐代（六一八～九〇七年）の女帝武则天時代の女官である。当時、江南（長江南部）の貴族、豪族が大量の土地を併呑したため、皇室の支配的地位が危くなつた。謝瑤環は封建支配階級の利益を擁護するため、江南の巡按使に任命されたが、のちに貴族、豪族に謀殺された。

⑪ 公李慧娘は、反党分子孟超が書いた昆劇で、これも反党・反社会主義の大毒草である。劇中の主人公李慧娘は、南宋（一一二七～一二七九年）末期の奸臣賈似道の妾で、のちに賈似道に殺された。作者は、死後悪鬼にばけた李慧娘の「復しゅう精神」を大いにたたえたが、そのねらいは、社会主義制度とプロレタリア独裁を陰に陽に攻撃し、反党分子や社会の化物どもの「冤罪」を訴えることにあった。

⑫ 魏徵（五八〇～六四三年）は、唐代の皇帝——李世民の大臣の一人で、歴史上「直言」で有名であった。

反革命二面派 周揚を評す

1967年 初版発行

定価 50 円

出版者

外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者

中国国際書店
(北京 P. O. Box399)

编号: (日)3050-1727

3-J-834P
00035

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東選集（第一巻）

本巻には、第一次国内革命戦争の時期（一九二四～一九二七年）と第二次国内革命戦争の時期（一九二七～一九三七年）における、毛沢東同志の十七編の著作がおさめられている。

三〇〇円

毛沢東選集（第二巻）

本巻には、抗日戦争が勃発した一九三七年七月から、蒋介石が発動した二回目の反共の高まりを撃退した一九四一年五月までの時期における、毛沢東同志の四十編の著作がおさめられている。

三〇〇円

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店（北京）

毛沢東著作選

上製
五八〇円
並製
四四〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録

赤色ビニール表紙 一五〇円

毛沢東主席の人民戦争についての語録

赤色ビニール表紙 二〇円

中国社会各階級の分析

三〇円

新民主義論

六〇円

延安の文学・芸術座談会における講話

四〇円

アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話

三〇円

毛沢東同志は論じている――

帝國主義といっさいの反動派はハリコの虎である

四〇円

「人民に奉仕する」「ベチュエーンを記念する」「愚公、山を移す」

四〇円

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と

そのすべての手先をうち破ろう

三〇円

――アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人、コンゴ（レ）人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話

敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである

三〇円

書物主義に反対する

三〇円

農業協同化の問題について

四〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店（北京）

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店（北京）

文学・芸術に関する五つの文献

湖南省農民運動の視察報告

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ

党内のあやまった思想の是正について

抗日の時期における中国共産党の任務

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

中国共産党全国宣伝工作会议における講話

二〇円

六〇円

三〇円

二〇円

四〇円

四〇円

六〇円

四〇円

★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦

目次内容

三四〇円

国際共産主義運動の総路線についての提案

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
スターリン問題について

ユーゴスラビアは社会主義国か
新植民地主義の弁護人

戦争と平和の問題での二つの路線
根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である
プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓
フルシチョフはなぜ退陣したか

付録

ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会にあてた書簡
ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡

中国国際書店（北京）

中国国際書店（北京）

北京 外文出版社

中国国際書店（北京）

中国国際書店（北京）

北京 外文出版社

人民戦争の勝利万歳

——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

林彪

四〇円

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線
統一戦線の路線と政策を正しく実行する
農民に依拠し、農村根拠地を樹立する
新しい型の人民の軍隊を建設する
人民戦争の戦略・戦術を実行する
自力更生の方針を堅持する
毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義
人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先のうち勝つ
フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定
中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報

三〇円

三〇円

近刊予告

★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第三巻)

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について
人間の正しい思想はどこからくるのか

小さな火花も広野を焼きつくす

日本帝国主義に反対する戦術について

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

中国革命戦争の戦略問題

実践論

矛盾論

人間の正しい思想はどこからくるのか

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

